

秋田県地域づくりワークキャンプ 五城目町地域診断実習活動報告書

【実習期間】

8月17日～8月30日

【班員構成】

上田集士 (秋田大学医学部 2年)

薄井咲樹 (慶應義塾大学看護医療学部 2年)

加藤のどか(国際教養大学国際教養学部 2年)

小田切優奈(秋田大学医学部 1年)

中沢遥花 (慶應義塾大学環境情報学部 2年)

永田みのり(慶應義塾大学医学部 3年)

細井真加 (宇都宮大学 地域デザイン科学部 4年)

堀元嶺 (慶應義塾大学理工学部 3年)

【コーディネーター】

漆畑宗介

八嶋美恵子

1. 実習概要		3
2. 事前準備		3
2.1. 町の概要		3
2.2. 地理的環境		4
2.3. 健康と社会福祉		4
2.4. 経済		4
2.5. 交通と安全		5
2.6. 政治と行政		5
2.7. コミュニケーションと情報		7
2.8. 教育		7
2.9. レクリエーション		8
3. 実習スケジュール		9
実習期間: 2025年8月17日～8月30日		9
4. 現地実習		10
4.1. 前半1週間(8月17日～23日)		11
4.1.1. 8月17日		11
4.1.2. 8月18日	12	
4.1.3. 8月19日	12	
4.1.4. 8月20日		13
4.1.5. 8月21日		14
4.1.6. 8月22日	15	
4.2. 後半1週間(8月24日～30日)		16
4.2.1. 上田集士 (秋田大学医学部 2年)		16
4.2.2. 薄井咲樹 (慶應義塾大学看護医療学部 2年)		16
4.2.3. 加藤のどか(国際教養大学国際教養学部 2年)		20
4.2.4. 中沢遥花 (慶應義塾大学環境情報学部 2年)		21
4.2.5. 永田みのり(慶應義塾大学医学部 3年)		24
4.2.6. 細井真加 (宇都宮大学 地域デザイン科学部 4年)		28
4.2.7. 堀元嶺 (慶應義塾大学理工学部 3年)		28
4.2.8. 小田切優奈(秋田大学医学部 1年)		33
5. 発表資料		33
5.1. 中間報告会		33
5.2. 最終報告会		39
6. 各参加者の学び		47
6.1. 上田集士 (秋田大学医学部 2年)		47
6.2. 薄井咲樹 (慶應義塾大学看護医療学部 2年)		47
6.3. 加藤のどか(国際教養大学国際教養学部 2年)		47
6.4. 中沢遥花 (慶應義塾大学環境情報学部 2年)		47
6.5. 永田みのり(慶應義塾大学医学部 3年)		48
6.6. 細井真加 (宇都宮大学 地域デザイン科学部 4年)		48
6.7. 堀元嶺 (慶應義塾大学理工学部 3年)		48
6.8. 小田切優奈(秋田大学医学部 1年)		49
7. 謝辞		49

1. 実習概要

1.1. 目的

本実習は「ウェルビーイングな地域づくり」をテーマとし、参加学生が秋田県五城目町に滞在し、地域課題の発見から解決策の実践までを行うプロジェクトである。医療や健康、幸せといった「Well-being」の概念について、地域での学びを通して考えを深めることを主な目的とする。

1.2. 概要

期間: 2025年8月17日～8月30日(14日間)

場所: 秋田県南秋田郡五城目町

宿泊施設: 森山ビレッジ

主な活動内容:

事前学習: 統計データから地域の特徴や課題を分析する。

現地調査(1～7日目): フィールドワークやヒアリングを通じて、地域の特徴と課題を具体的に洗い出す。

中間報告(8日目): 調査結果を住民向けに報告する。

課題解決アクション(9～13日目): 課題解決のための計画を策定し、実践する。

最終報告(14日目): 活動の成果を住民向けに報告し、結果を分析する

コーディネーター:

漆畑 宗介(うるしばた そうすけ)氏

八嶋 美恵子(やしま みえこ)氏

2. 事前準備

コミュニティーアズパートナーモデルに乗っ取り、9つの側面から町について調べた。

2.1. 町の概要

五城目町は秋田県中央部、八郎潟の東側に位置する人口約8,300人の町である。面積は約215km²で、県内17位の広さを有する。昭和29年の町村合併により成立し、平成の大合併時には独立を維持。地理的には秋田市から約30kmに位置し、秋田市の通勤圏に含まれる。

町のキャッチコピーは「百年後のふるさとをつくる」。少子高齢化・過疎化が進行する中で、「地域住民が支え合い、次世代へ続く地域社会を構築する」ことを長期的ビジョンとして掲げている。

町の人口構成では高齢化率が約42%（2024年）に達しており、県平均を上回る。若年層流出に伴い、人口減少速度は加速している。

地勢は西部が平野、東部が丘陵・山地で、町中心部（五城目地区）に行政・商業機能が集中。生活圈と周辺部（馬場目・内川・森山など）との間に生活・情報格差が存在する。

2.2. 地理的環境

五城目町は豊かな森林と水資源を有する町で、森林面積は約83%を占める。八郎湯に近く、馬場目川や内川など複数の河川が流れるが、その一方で洪水・土砂災害リスクが高い。

特に2023年7月豪雨では馬場目川流域が氾濫し、住宅被害・道路寸断・避難所開設が発生。これを契機に、防災計画の見直しや災害時要援護者支援体制の強化が進められている。

自然環境は四季が明確で、春の桜、夏の蛍、秋の紅葉、冬の雪景など観光資源としての価値も高い。町内には「五城目朝市通り」「馬場目川」「五城目城址公園」など自然と文化が融合した空間が点在する。

課題としては、森林管理の担い手不足による荒廃、熊の出没（年間50件以上）、そして気候変動による豪雨・土砂災害リスクの増加が挙げられる。

2.3 保健医療と社会福祉

町には内科・歯科・整形外科など複数の診療所が存在し、広域医療圏としては湖東厚生病院が中心的役割を担う。町民の医療アクセスは一定程度確保されているが、高齢化と交通弱者の増加により「受診行動の制限」が課題である。

福祉面では、特定健診、母子保健、介護保険、精神障害者医療費助成制度（マルフク）などが整備され、在宅医療・訪問診療が充実している。

特に「ショートステイかがやき」では、利用者の“家庭にいるような安心感”を重視したケアが実践され、地域との関係性を維持する取り組みが評価されている。

町民の健康課題としては、生活習慣病（糖尿病・高血圧）とフレイル予防が中心。健康福祉課による「健康ポイント事業」「いきいきサロン」など、予防重視型施策が展開されている。

2.4. 経済

・所得

五城目町の平均世帯年収は445万円であり、全国平均の503万円を下回っている。また、年収300万円未満の世帯が全体の約半数を占めている。

・雇用状況

産業人口は、男性では製造業や建設業、卸・小売業、農業が多く、女性では医療福祉や卸・小売業、製造業が多い。地域が特定の産業にどれほど特化しているかを示す指標である特化係数は農業と複合サービスで高い。情報通信業や学術研究・専門・技術分野、不動産業は就業者数は少ない。

2.5. 交通と安全

・鉄道/高速道路

五城目町内に駅はなく、まちの最寄り駅は八郎潟駅である。西側には高速道路、JRの鉄道が通っているが、東側には通っていない。

・バス/タクシー

広域路線バスが五城目町を含めた3町村の観光施設や商業施設、駅、病院などを結んでいる。また、デマンド型乗合タクシーには馬場目線・富津内線・森山線・内川線といった地域ごとの種類がある。

・公共交通のみで対応しきれない移動需要に対する他の輸送資源の活用

五城目町では上記のようなバスや乗合タクシーなどによって、町民の移動手段を確保しているが、エリアが広い郊外部ではサービスを提供しきれない公共交通空白地域も存在する。このため、町内の輸送資源の有効活用や公共交通との役割分担を図り、輸送資源を組み合わせることによって、各地域における移動手段の確保が必要になっている。

・五城目町地域公共交通計画 令和4年3月

基本理念は、「地域住民が主体となり、公共交通事業者、行政等関係者と協働・連携のもと、誰もが安心して利用しやすい交通環境を実現し、住民の自立した日常生活を支えるとともに、地域間交流を促進する拠点づくりを進め、にぎわいあふれるまちの実現を図ります。」ということである。

また、公共交通の課題としては、以下の6点が挙げられている。

1. 人口減少・高齢化の進展に対応した地域公共交通機関の維持
2. 中心市街地を含む公共交通機関の解消
3. 公共交通機関の乗継利便性の確保、交通結節点の解消
4. 地域特性に応じた多様な交通サービスの提供
5. 情報提供・発信体制の整備
6. 新たな技術の有効活用

2.6. 政治と行政

・五城目町長と施策

2025年10月現在、五城目町の町長は荒川滋町長である。提言する施策には5本の柱と45の施策があり、五つの柱は以下の5項目から構成されている。

柱① <根底から強い町へ> (施策数 14)

→防災・減災で災害に強くする
町の経済を強くする

柱② <町に住む方々が主役の町へ> (施策数 10)

→町で暮らす人々のコミュニティを強化・創出

柱③ <圧倒的に子育てを応援する街へ> (施策数 8)

→教育内容の充実、安定したこども園の経営

柱④ 活性化で儲かる農林業へ (施策数 7)

→後継者や連携を強化

柱⑤ さらに文化の薫り高い町に (施策数 6)

→伝統の継続・芸術の促進

・行政組織

五城目町の行政組織には、まちのPRを行うまちづくり課、朝市・ものづくりの応援・空き店舗情報の提供、きゃどっこまつり広告協賛申し込みなどを担う商工振興課、教育留学を担当する学校教育課、交流センターや地域図書館を管轄する生涯学習課などが含まれる。

・千代田区との関わり

五城目町は、姉妹提携する千代田区の児童と相互訪問を行なっている。具体的には、それぞれの地域の自然や都市文化の体験を通じて交流をし、児童の人間性や社会性を育む事業を実施している。夏季は千代田区、冬季は五城目町で開催しており、2年ごとに訪問先を交換している。事業は学校教育課など複数課が連携し進められ、参加児童の中には卒業後もボランティア参加の意欲を示す者もいる。予算が減少する中で、支援員の増員やホームステイ受入枠の確保、事業メニューの見直しなど、継続的な運営に向けた課題への対応が求められている。

・まちづくりアンケート結果

2025年の1/24から2/7まで、五城目町民を対象に実施されたアンケート結果について述べる。

消防、教育、食育、キャリア教育に関して満足度が高かった一方、空き家、新規企業・就職機会、農業の担い手に関して満足度が低かった。また、医療、防災、子どもに関する認識の重要度は高いという結果が出たが、芸術や文化財、町営住宅、スポーツに関しては需要度が低いという結果となっていた。

2.7. コミュニケーションと情報

・広報誌

「広報ごじょうめ」という五城目町役場のまちづくり課広報公聴担当が発行する月刊誌がある。1959年創刊で令和7年7月号で1091号目を迎えた。五城目町の公式サイトから全ページアクセスすることができる。主な内容は、行政からの報告や地元の学校からのお知らせ、地域の活動の報告、なつかしのごじょうめのわらした、こんにちは赤ちゃんといった地域に根ざしたもので、1冊20ページほどである

・公式SNS

五城目町は、Facebook、Instagram、X、Youtubeの公式アカウントを持っている。Facebookには、町が関わるイベントのお知らせや、行事予定、町の話題について投稿している。InstagramにはFacebookと同様の投稿に加えて、町の風景や町の魅力などの投稿がある。#あっと五城目をつけた投稿をリポストしており、町内で撮られた写真の共有する場となっている。Xには、行政情報や災害情報、イベント情報を投稿している。Youtubeには「ふるさとCM大賞」の出品作品と五城目町のPR動画の投稿がある。

2.8. 教育

・学校の位置

五城目町にある幼稚園、小学校、中学校、高校は以下の図のように位置している。

幼稚園：もりやまこども園(本園、大川分園)

平成23年度から大川保育園を分園とし、五城目小学校と隣接している。

小学校：五城目小学校

町内唯一の小学校であり、「越える学校」をコンセプトに2021年新校舎に移転した。町の温水プール施設などとも隣接し、図書館は地域図書室「わーくる」として地域の形にも解放している。地域留学なども受け入れをしている。「みんなの学校」の会場として使われており、プログラムの一部は五城目小学校の授業を一般公開したものになっている。

中学校：五城目中学校

五城目町唯一の中学校で、現在の校舎は2009年に建てられた比較的新しいものとなっている。だまご鍋の調理、地域連携授業、職場体験、同窓生の講演会など、地域の魅力を体感する機会が提供されている。



・「みんなの学校」

休日、五城目小学校とその周辺のエリアは「五城目みんなの学校」となり、全町民に解放される。0歳から100歳以上でも通える学びの場を目指しており、講座の内容は多岐にわたる。趣味から職業体験、五城目小学校の授業が解放される時もあるなど、世代と分野を超えた学びの場が提供されている。

・教育留学

五城目小学校と五城目第一中学校では、秋田県外の小・中学生を受け入れる「教育留学」を実施している。留学生は学校での授業に参加するほか、森山登山や溪流釣りなど五城目町の豊かな自然を活かした体験学習にも参加することができる。

2.9. レクリエーション

五城目朝市(約500年の歴史)をはじめ、盆踊り、夏祭り、神社祭礼、郷土芸能など、伝統的行事が今も息づく。

しかし、人口減少・高齢化・熊出没などにより、行事の縮小・中止が相次いでいる。

町は文化振興として、「千代田区児童双方向交流事業」を継続実施。都市と農村の相互理解を促進し、子どもの社会性育成や地域誇りの醸成に寄与している。

また、「五城目町文化協会」では芸術展・演奏会・創作活動を支援し、地域住民の文化的自己表現を推進している。

地域文化の担い手不足が顕著であり、伝統文化の継承と新しい文化創出(クラフト・デザイン・地域ブランドづくり)を両立する取り組みが求められている。

3. 実習スケジュール

実習期間: 2025年8月17日～8月30日

日程	概要
8/17	<ul style="list-style-type: none">・八郎潟駅集合・森山ビレッジ(宿泊先)移動・オリエンテーション・買い出し・歓迎会(シェアビレッジ町村)
8/18	<ul style="list-style-type: none">・貸し棚おうみ屋でのゲスト講師によるトーク(工藤正孝様、工藤兼雄美様)・副町長挨拶
8/19	<ul style="list-style-type: none">・森山登山・五城目朝市通りでのフィールドワーク・ショートステイかがやき見学
8/20	<ul style="list-style-type: none">・馬場目わくわくの会への参加・訪問看護見学・清流の里・友愛館・避難所
8/21	<ul style="list-style-type: none">・訪問介護見学・まどいの家・森山公民館・福祿寿
8/22	<ul style="list-style-type: none">・もりやまこども園大川分園
8/23	<ul style="list-style-type: none">・中間発表
8/24	<ul style="list-style-type: none">・アクションプラン会議
8/25	<ul style="list-style-type: none">・各プロジェクト実施
8/26	<ul style="list-style-type: none">・各プロジェクト実施
8/27	<ul style="list-style-type: none">・各プロジェクト実施
8/28	<ul style="list-style-type: none">・各プロジェクト実施
8/29	<ul style="list-style-type: none">・各プロジェクト実施・BBQ
8/30	<ul style="list-style-type: none">・最終発表・八郎潟駅解散

4. 現地実習

・実習形式

今回の実習は、前半と後半の二部構成で行われた。

前半の一週間(17~23日)は「INPUT」の期間として、五城目町にあるコミュニティやボランティア団体、企業など、社会活動を行っているさまざまな団体を訪問し、お話を伺った。ここでは、事前調査で立てた仮説の検証や新たな課題の発見を目的とした。

その後、前半で得た気づきを地域住民に向けて中間発表で共有し、フィードバックを受けたうえで、各自が見つけた課題を解決するためのアクションプランやプロジェクトを立案した。後半の一週間では、その計画を実際に行い、最終的に成果や結果を地域住民に再び共有して実習を終えた。

前半の実習では、コーディネーターである八嶋さんがあらかじめ各訪問先にアポイントを取ってくださっており、基本的には事前に共有された工程表に沿って活動を行った。また、すきま時間を活用して自由に地域住民へインタビューを行った。

実習全体を通してインタビューは半構造化インタビュー形式で、あらかじめ質問内容がある程度整理しつつも、話し手が自由に語れるよう配慮した。そのため、特定のインタビュアーや書記を設けず、各自が興味を持った内容をメモし、さらに深く知りたい点を質問する形をとった。

このように、同じ実習内容を経験しながらも、学生それぞれが異なる関心や視点を持ち、独自の学びを得ることができた。

・チェックイン・チェックアウト

本実習では、毎日の活動の前後に必ず「チェックイン」と「チェックアウト」を全員で行った。

チェックインとは、これからの活動に集中するために、今感じている思いや感情に意識を向け、それを全員で共有する時間である。加えて、その日にどのような活動を行うか、何を重視したいかといった点についても共有した。

一方、チェックアウトは、活動を終えた後にその日の実習で得た気づきや考え、そして現在の感情を共有する時間である。

このチェックインとチェックアウトの時間は、本実習の大きな特徴であったといえる。考えや感情を共有することで、他の参加者の視点を知ることができ、また学生同士やコーディネーターからのフィードバックを通して自分の考えをより深めることができた。さらに、その日の感情や悩みを分かち合うことで、実習内容の理解を深めるだけでなく、参加者同士が自然にお互いを理解し、尊重し合う関係を築くことができた。

4.1. 前半1週間(8月17日～23日)

4.1.1. 8月17日

・森山ビレッジでのチェックイン/自己紹介

八郎潟駅に集合後は2週間の滞在先となる森山ビレッジへ移動し、実習の概要説明と自己紹介が行われた。今回のワークキャンプのテーマの中核となる言葉は「共奏」と「ひとつむぎ」である。地域やメンバーの間に生まれる”違い”は時にストレスにもなるが、その”違い”を楽しみ、地域と学生が共奏して欲しいとのお言葉をいただいた。また、ワークキャンプにおいて考え続けてほしい問いとして、「私にとってのwell-beingとは？五城目にとってのwell-beingとは何か？」という点が挙げられた。

その後、2週間の実習で毎日行うチェックインとチェックアウトの説明があった。本10周のような場に来ると「他者とつながらなきゃ！地域をみなきゃ！」という方向に思考が走りがちであるが、チェックイン・チェックアウトでは、他とつながる前にまずは自分とつながる時間を取ることを目的としている。地に足をつけて椅子に深く腰掛け、五感で感じることを、いま自分が何を感じているのかに向き合うことが大事であることを学んだ。

・八嶋さんの仕事紹介/ストーリーテリング

本実習のコーディネーターであり、五城目町の集落支援員として活動されている八嶋美恵子さんが、ご自身の仕事とこれまでの人生のストーリーテリングをしてくださった。八嶋さんは、ご自身の集落支援員としての仕事を「人の魅力に感動し、それを表現し、人と人を繋げる仕事」と表現され、幸せを感じるしゅんかんとして、“お互い様”と感じるときを挙げられた。また、8月18日に行うストーリーテリングのお手本として、八嶋さんがご自身の人生を語られた。

・森山ビレッジ案内

クラウドファンディングによって資金を集め、近くの木材とデジタルファブリケーションの技術を用いた建物である。5棟が一つ屋根の下でつながっている設計になっている。

・シェアビレッジ町村

夕方から、シェアビレッジ町村で住民の方々と一緒にだまご鍋を作った。参加した住民には、五城目町で生まれ育ち今も住んでいる人と、他の地域から移住してきた人の二つのタイプがおり、移住してきた方々は20代であった。話を聞くと、若い世代の多くは進学や就職をきっかけに町を離れることが多いという。

4.1.2. 8月18日

・副町長挨拶

役場にて八嶋さん、米澤さん同席のもと、副町長をはじめ、役場職員の方々、記者の方にお話を伺った。

副町長からは、五城目町のこれまでの歩みや現状について説明を受けた。五城目町は、古くから海と山とを結ぶ交通の要所として栄えてきた歴史を持つ。しかし現在は、若者の町外流出が進み、人口減少が深刻化しているとのことである。それに伴い、地域の担い手不足や活力の低下など、新たな課題も生じていることがわかった。

また、副町長からは、五城目町の問題解決に取り組むことだけにとらわれず、この実習を通して学生同士や地域住民との新たな出会いや関係を大切に、町そのものを楽しんでほしいという温かい言葉を頂いた。地域との関わりを通して学びを深めることの大切さを改めて感じた。

・工藤正孝さん

通称「えはぽん先生」と呼ばれている。その由来は、驚きの「え」気づきの「は」ひらめきの「ぽん」からきている。秋田大学の出身で、元高校教師。退職後はもりやまこども園大川分園の園長を務めた。現在は、保育園で定期的に科学実験教室を開き、子どもの自主性を尊重し、自ら考える力を育てることに力を入れている。

五城目町の出身で、町が活気にあふれていたころをよく知る人物でもある。今回の実習では最もお世話になった方の一人であり、ほとんどの活動に同行していただいた。移動の際には車を出してくださいなど、多方面でご支援をいただいた。

また、先生は「今回の実習を通して、同じ五城目町に住んでいながらこれまで関わりがなかった人々と出会うきっかけになった」と話しており、私たちの実習が地域内の新たな交流を生み出す機会になっていることに気づかされた。

・工藤兼雄美さん

「森山もっと盛り上げたい隊(3MO隊)」の一員として、五城目町の自然を愛し、SNSで森山の魅力発信や登山イベントの紹介を行っている。詩作も好み、自然との関わりを大切にしている。活動の中で感じた町の問題や展望についてお話いただいた。

かつて多くの人で賑わった森山は熊の出没や登山道管理の問題で衰退した。そして現在は行政の限界を補いながら民間ボランティアである3MO隊が再生へと取り組んでいる。

行政は安全管理や手続きの煩雑さから新しい取り組みに慎重になりがちだが、3MO隊は「できることから始めよう」を合言葉に、登山道の整備や安全講習の開催など実践的に行動。柔軟な対応力で課題を一つひとつ乗り越えてきた。

森山再生の鍵は、行政の制約を超えて地域を思う人々の自発的な行動力にあると考えている。

4.1.3. 8月19日

・森山登山

工藤兼雄美さんをはじめとする3MO隊の方々の案内で、森山の山頂まで登った。登山道は徒歩でも車でも山頂まで到達でき、かつては地元の学校行事やトレーニングにも利用されていた。しかし、熊の出没により現在は登山行事が中止されている。

山頂付近ではキャンプも可能で、森の木々の一部は手入れが行き届いており、地域の方々の活動によって環境が守られている様子が見えた。

4.1.4. 8月20日

・馬場目わくわくの会(馬場目ふれあいセンター)

馬場目地域では、「馬場目で世界を感じるなつまつり」の報告と今後の方針、「元気ムラ大交流会 in 大仙」の確認、「馬場目わくわくの会」の参加者増加のための意見交換、「カフェ×けんこう体操」の連絡を中心に会議が行われた。この会議は議題の有無に関わらず毎月一度開催され、住

民同士のつながりを保つ場となっている。「馬場目わくわくの会」は県庁の呼びかけで始まり、五城目町の約340世帯・13町内のうち、世帯数が減少して機能が難しくなっている地域同士が連携して活動を続けている。町を「起こす」のではなく「残す」ことを目指し、小さくても継続的な取り組みを積み重ねることの重要性が共有された。

また、移住者に対しては住民から「困ったことがあれば聞いてほしい」「一生懸命やっている人を応援したい」といった声が多く聞かれ、地域全体が受け入れる雰囲気がある。実際に移住者の中には「温かい空気を感じて移住を決めた」という人もおり、双方の信頼関係が育まれている。

JICAとドチャベンジャーズが主催した「馬場目で世界を感じるなつまつり」は、子ども向けイベントの充実と地域交流の再活性化を目的に開催された。かつて各部落で開かれていた祭りが減少していた中で、今回の祭りは82名が参加し、多世代が集う貴重な機会となった。しかし、子ども向け企画が中心で高齢者が楽しみにくかった点や、ビアガーデン開催に伴う交通手段の課題も指摘された。今後は、宣伝よりも「楽しそうな雰囲気づくり」を重視し、地元住民と移住者が共に企画・運営する形で継続していくことが求められる。

馬場目ベースでは移住者が積極的に活動しているが、住民には内容が十分に伝わっていない面もある。夏祭りを通じて交流の場をつくり、世代を超えたつながりを深めることが大切である。今後は、JICAが不在でも地元とドチャベンジャーズが中心となり、地域主体の形で活動を継続することが期待される。移住者は年に1~2組でも十分であり、数を追うより地域に合った人を丁寧に迎えることが、五城目町・馬場目の持続的な未来につながると感じた。

・馬場目ベース

馬場目ベースには複数の企業や団体が入居しており、それぞれがオフィスや活動拠点として活用している。部屋を借りず、自由に出入りして作業する人もおり、地域内外の多様な人が関わる場所となっている。現在この施設を運営・活用しているのは「ドチャベンジャーズ」であり、もともとは小学校として建てられた校舎を再利用している。

この校舎は、完成からわずか10年ほどで少子化により廃校となった。しかし、当時の町長は「今後ますます財政が厳しくなり、新しい建物を建てるのが難しくなる。その前に、今いる子どもたちに最高の教育環境を提供したい。たとえ廃校になっても、建物は別の形で活かせばよい」という考えを持っていたとされる。その先を見据えた判断と、子どもたちのために最善を尽くす姿勢には強く感心させられる。

現在、この校舎は地域資源として再生し、馬場目ベースとして多様な人々の交流や新たな活動の拠点となっている。廃校を単なる終わりではなく、新しい始まりとして捉える町の柔軟性を感じられる。

・清流の里

五城目町の中でも最も山深く、端に位置する食事処である。かつては宿泊も可能であったが、近年は熊の出没が頻発しているため、現在は食事のみの営業となっている。店では、五城目町で採れる旬の山菜を中心とした料理を提供している。五城目町の中心街からの来店客が主な客層で、地域のちょっとしたお出掛けスポットとなっている。

・友愛館

旧杉沢小中学校の校舎を活用し、現在は記念館として運営されている。館内には、森山で発掘された陶器や昔の生活道具などが展示されており、地域の歴史や文化を伝える場となっている。

この施設は、馬場目ベースと同様に、少子化による廃校を見据えて再活用されたものである。また、部屋の貸し出しも行っており、ドラム奏者やチェロ奏者などが練習場所として利用されているほか、周辺地区のイベント会場としても利用されている。

・避難所

土砂崩れの危険により警戒レベル4が発令され、県庁の指示で緊急避難を行い、一晩を避難所で過ごすことになった。避難者は私たちのほかに1名のみであった。避難所では、約20人が収容できる大会議室に畳を敷き、防水処理が施された袋入りの毛布を使用して過ごした。しかし、一晩の滞在で体調を崩す参加者もあり、決して快適とは言えない環境であった。短い時間ではあったが、実際に避難所で夜を過ごしたことで、避難生活が心身に大きな負担を与えるものであることを実感した。また、高齢者避難情報が出ていたにもかかわらず、実際に避難した住民が一人しかいなかったことから、後日の町民との会話を通じて、警報の段階では避難しない人が多いこと、避難場所を知らない人、あるいは移動手段がない人など、避難が適切に行われたい要因を把握することができた。

4.1.5. 8月21日

・まどいの家

毎日10時から11時30分まで、会員の中で希望する人が集まり、コーヒーを飲みながら談話する会が開かれている。主に年配の男性が参加しており、地域の交流や見守りの場となっている。施設は宿泊も可能で、過去には千代田区の教育留学で訪れた子どもたちを受け入れたこともある。また、婦人会の集まりなどにも利用されている。かつては花壇づくりなどの整備活動も行われていたが、参加者の高齢化により現在は雑談中心の集まりへと変化している。こうした変化から、高齢者による継続的なコミュニティ活動では、体力を要するハード面の活動よりも、無理なく続けられるソフト面の活動を中心とすることが重要であると感じた。大々的な募集は行っていないが、新しい参加者は随時受け入れており、緩やかに人がつながる場として機能している。

・森山公民館

岡本一区の森山公民館を訪問し、館長からお話を伺った。かつてこの公民館は避難所としても利用されていたが、周辺の土砂災害の危険性が高まったため、現在は避難所としての機能を停止している。館長によると、この地域の土砂災害は主に杉の木の減少の影響によるものだという。

公民館や森山ヴィレッジが位置する岡本地区は、もともと一区と二区に分かれる前は一つの地区だった。現在、岡本一区には68世帯、二区には51世帯が居住しており、近年は野田地区を中心に田畑が宅地へと変わりつつある。

館内の倉庫には、地域の祭りで使用される神輿と太鼓が保管されており、毎年5月5日の祭りや8月13日の五城目町の祭りで使用されている。町内会では、花壇整備や子ども神輿、草刈り、世代間交流ワークショップなどを行い、地域のつながりを保っている。特にワークショップ後に住民同士でお酒を交わしながら語り合う時間を設けており、その中で本音の意見や地域への要望が出ることも多いという。館長は「そうした自然な交流の場こそが地域づくりの基盤であり、公民館の役割として重要である」と話していた。

また、公民館では40年以上続く大正琴の会が活動しており、地域の文化的なつながりを今も支えている。今回の訪問を通して、公民館が単なる集会所ではなく、世代を超えて人々がつなが

り、本音で語り合える地域の拠点として機能していることを実感した。特に、住民が自然な形で交流しながら意見を交わすことが、町内会の活動を持続させる大きな力になっていると感じた。

・福祿寿酒造見学

福祿寿酒造株式会社は、江戸時代の元禄元年(1688年)に初代・渡邊彦兵衛が加賀国から五城目町へ移り住み創業した。以来三百年以上にわたり、地元の米と水、そして人にこだわった酒造りを続けており、昭和28年には株式会社渡邊彦兵衛商店として法人化、平成16年に現在の社名へと改称された。蔵の建物は、大正期の大火を免れた上酒蔵と下酒蔵を中心に構成され、平成8年には国の登録有形文化財に指定されている。

敷地内から湧き出る中硬水を仕込み水として使用し、地元農家と協力して栽培する酒米を用いることで、地域の恵みを最大限に生かした酒造りを実現している。また、伝統的な木製の甕や建築を大切にしながら、現代的な品質管理技術を取り入れることで、伝統と革新を両立させている点も特徴である。

地域とのつながりも深く、「地の米・地の水・地の人」を理念に掲げ、五城目町の自然と文化を象徴する存在として、町の活性化にも大きく貢献している。蔵の一角にはカフェ「下夕町醸し室 HIKOBE」が設けられており、地域住民や観光客が気軽に立ち寄れる場として親しまれている。

現当主は地域イベントにも積極的に参加しており、地域の興隆に深く関わっている。お話の中で印象的だったのは、「五城目町を良くしたいという思いを持つ人は多いが、実際に行動に移す人は少ない」という言葉である。今回の実習を通して、実際に地域活動に参加する人々の多くはもともと交流や地域貢献に関心がある層であると感じた。今後、地域全体の活性化を考える上では、活動に興味がない人々や消極的な住民も巻き込み、無理なく参加できる仕組みをつくることが重要であると考えた。

4.1.6. 8月22日

・もりやまこども園大川分園

園児数は学年によって2~3人、多い学年でも数名ほどで、1人だけの学年もある少人数の保育園である。私たちは工藤正孝さん(えはぽん先生)とともに、園児たちに向けて科学実験を行った。園全体ではおよそ20人ほどの園児が在籍しており、それに対して保育士の数が多く、一人ひとりの子どもに丁寧に向き合う保育が実践されている。その手厚い体制や温かい雰囲気から、離れた地域から通わせている保護者もいるという。少人数だからこそ可能なきめ細やかな保育や、子ども一人ひとりの興味や自主性に応じた教育の重要性を実感した。

4.2. 後半1週間(8月24日~30日)

4.2.1. 上田集士(秋田大学医学部2年)

4.2.2. 薄井咲樹 (慶應義塾大学看護医療学部 2年)

〈前半一週間で感じたこと〉

前半一週間でたくさんの方との出会いを通して、一人一人が五城目への愛を持っていると感じた。人口減少や高齢化によって町が変わっていく様子を目の当たりにし、この町を「残す」ために行動をしている姿勢が印象的であった。当初私は、「発展する」ことが町にとって望ましいことだと考えていた。しかし、町の方々は既に見知った人たちとこの場所で過ごすことに幸せを感じており、それを残していくことを望んでいたのである。一週間での町の人との出会いや町での生活を通して、今の状態を残したいという思いと、人口流出や高齢化といった現実的な問題のギャップに難しさを感じた。

五城目町は移住者の受け入れにとっても寛容な町で、実際に今回の実習でも多くの移住者の方と出会った。初めに、私は五城目町を「残す」ための策として「移住者」に焦点を当て、移住者が町で孤立せず、町での生活を楽しむためには、移住者が町のコミュニティに参加しやすい環境を作ることが有効だと考え、各コミュニティの「開かれ度合い調査」を実施しようと考えた。しかし、これはネガティブな印象を受けるものであり、私五城目で感じたしあわせの体感とは離れたものであることから、このプロジェクトの実施に踏み切れずにいた。そこで、馬場目わくわくの会での保坂茜さんの「楽しいところには人が集まる」という言葉を思い出し、五城目にあるしあわせを自分のしあわせと重ね合わせ、発表することにした。

〈プロジェクトの実施〉

私は、『五城目にある「しあわせ」～「楽しいところには人が集まる？」の視点からみた五城目町内のコミュニティ』と題し、私が実際に感じた町にあるしあわせを共有する発表を実施した。

・テーマ設定の経緯

今回のプロジェクトテーマは「楽しいところには人が集まる？」とした。このテーマ設定のきっかけは、馬場目わくわくの会で耳にした「楽しいところには自然と人が集まるのではないか」という茜さんの言葉である。町での出会いや生活を通して、町の人々の温もりや優しさの心地良さを感じ、私は五城目町の一番の魅力はそこにあると考えた。実際にフィールドワークを重ねる中で、コミュニティが“楽しい場所”であることの意味や、そこに人が集まる理由を実感することができた。

・実施内容

私は「町内の人が集まる場所」に注目し、公民館や商店を訪問した。訪問先では、館長さんへのインタビューのほか、その場にいた方と会話したり、コミュニティ活動に参加したりした。日程と訪問先を以下に示す。

8/25 ・にこにこ商店

・団欒の家

・五城目朝市ふれあい館

8/26 ・みせっこあさみない

・内川地区公民館

8/27 ・富津内地区公民館

・馬川地区公民館

・町内センター

・大川地区公民館

・水沢地区町長宅

8/28 ・ふよう会(富津内地区公民館)

・ハーモニカ同好会(大川地区公民館)

・町民センター

8/29 ・最終報告会準備

8/30 ・最終報告会

以下に自分なりのしあわせの定義とそれぞれのコミュニティで私が感じた「しあわせ」を示す。

・しあわせの定義

五城目での2週間を通して、たくさんのしあわせに触れることができた。その時は何に、なぜ、自分がしあわせと感じたのか、漠然としたイメージしか持てず、よく理解できていなかった。その中で、五城目で感じたしあわせから、私は次の3つのしあわせの定義を見出した。

1. 心も体もリラックスした状態でいられること
2. プラスの気持ちでいられること
3. 暖かさを感じられること

心許せる仲間や安心できる環境にいたとき、私はとても心地よく感じた。また、人の温もりや優しさに触れたときに心も体も温かくなる経験を通じて、「これがしあわせだ」と感じた。

・私がそこで感じた「しあわせ」

以下に発表で用いたスライドを示す。

フィールドワーク① にこにこ商店



朝市通りにある商店。
(以前は五城目中央ドラッグ)

朝市の際に休憩に人が訪れ自然発
生的な交流が生まれる場所。
お店の方もとても暖かく、私たち
を迎え入れてご飯を振舞ってくだ
さった。
どんな人とも温かい雰囲気が生ま
れる憩いの場。

フィールドワーク② みせっこあさみない



地域の人がつながるきっかけ
となる場所。顔を見知った人
との日常のコミュニケーションが住民を明るく、健康にそ
せる地域唯一の空間。
私たちも会話に入れていただ
き、とっても楽しい時間を過
ごせました。
近所の神社をお勧めしてい
ただいたのに加えて、熊鈴を借
していただき、様子を見にき
ても下さいました。

フィールドワーク③ 富津内地区公民館（ふとう会）



富津内地区公民館で陶芸の活動をしている「ふとう会」

付き合いの長い仲間とゆったりマイペースに楽しむリラックス空間。陶芸を丁寧に教えてくださり、私たちの移動の際には車で送迎してくださいました。

フィールドワーク④ 馬川地区公民館



秋田で一番明るい場所☀
約10年続いているご婦人の集まりに参加させていただきました。明るくて元気で大きな笑い声と笑顔で溢れる賑やかな空間。お互いがお互いを大切に思っていることが伝わってきました。帰る際、玄関や部屋からずっと手を振ってくれていて、心が温まりました。

〈プロジェクトを通じた気づき〉

地域づくりワークキャンプのテーマは自分にとってのWell-beingと五城目町にとってのWell-bringを考えることにあった。私は自分にとってのWell-beingは「自分の心の動きを感じ取れること」であると考えた。2週間の五城目町での滞在の中で、私はたくさんの「しあわせ」と出会った。また、しあわせはしあわせとしてどこで待っているのではなく、その経験を個人の感性を通して「それがしあわせだ」と気付くことで初めて味わうことができる感覚なのだと分かった。しあわせという感情に限らず、様々な自分の感情に気づき、心を彩っていくことが人生を豊かにすると考えた。また、五城目町にとってのWell-beingは「人と人とが繋がること」にあると考えた。前半一週間での出会いや、コミュニティへの訪問を通して、それぞれに大切な人がいるということを感じた。繋がり数は少なくとも、大切にしたい縁があることやそこでの楽しさや暖かさは五城目の方々の活力になっていると感じた。

〈今後の展望〉

今回のワークキャンプは、五城目町を見ることを通じて自分を見つめる機会となった。活動を通して、自分が何に感動し、どんなことが好きなのかを改めて見つめることができた。この経験は、私の人生において大きな意味を持つものとなったと考えている。今後も今回のワークキャンプで見つけた“私らしさ”を大切にしていきたい。

また、五城目で感じた「しあわせ」は地域の人との関わり合いの中にあった。これから看護を学ぶ上でも、人と人との関わりは重要な視点であり、大切にしたい経験となった。

今回の五城目町や五城目町で関わった方々との出会いを大切に、これからも繋がってほしいと思う。

4.2.3. 加藤のどか(国際教養大学国際教養学部 2年)

4.2.4. 中沢遥花 (慶應義塾大学環境情報学部 2年)

中沢「ハザードマップを読む」

〈前半1週間で感じたこと〉

・やりたいことと町の課題

興味があることは防災について。熊がよく出ることや水害のリスクがあり避難した。そのようなことから、安全に暮らせることが重要であるし、水害が発生したり熊と共存する必要がある中でいかに災害から復旧するか、それができるまちづくりができるか考えたいと感じた。

また、馬場目わくわくの会にて、「ここがこのままでいいから100年残ってほしい」という意見と「何もしなければ衰退していく」という意見を聞いた。

五城目の課題と人の温かさなどのよいところを考えていくと、五城目町にとってのwell-beingは「安心」なのではないかという結論に達した。

・私のwell-being

五城目に来て様々な人と接する中で、自身があまり人と話すことが得意でないことに気がついた。他方で、人と一緒にいること自体や考えることがすごく好きで、「自分らしくいること」が自分にとってのwell-beingであると考えた。

〈プロジェクトの実施〉

・住民生活課の方のお話

8/26に住民生活課の方からお話を伺い、新しく作成しているハザードマップについて、その他五城目の防災についてお聞きした。以下、その時のメモを記す。

お話を伺ったのは役場の住民生活課の方で、1人は防災監という役職に就かれている。防災監とは、地域防災マネージャーか制度専門性を有する外部人材のこと。令和5年の水害をきっかけに導入された。令和5年の水害はこれまでに例がなく、桁が違っていた。今年度8月にも比較的大

きな水害があったが、その時には1時間にどっと雨が降っていて、令和5年は川の上流に非常に多く長時間の雨が降った。

馬場目川の川幅が40mに対し、内川川は7m、富津内川は10mと川幅が狭い。短時間の強い雨への対策について、議会でも質問をたくさんもらった。

令和3年に作成した防災マップでは、馬場目川しか洪水浸水のハザードマップがなかったのも、新しいもので内川川、富津内川も追加し、実績での洪水浸水範囲を記載する。

地域版タイムラインについて。自主防災組織が地域版タイムラインでワークショップを開催していた。役場もそのようなワークショップを開催したが、一度役場主導でやってみただけで、本当は自主組織でやってほしいと考えている。町主導で進めていくと行政に対しての意見が多くなってしまい、前に進めることができなくなるためである。一方で、外部講師をつけようという試みもあったが、自治地区内で話し合いたいという声があがり実現はしなかった。タイムラインは精度を求めるよりも単純明快なものを作る必要がある。形としては一応できているが、完成ではないしブラッシュアップしていけない。湯ノ又地区では進められていて、話し合い自体はされているとのこと。

阪神・淡路大震災の際、救助された方のうち20%が公助によるもので、残りの80%は共助によるものだった。それだけ共助は大切なものであるし、水害はある程度予測できるので、タイムラインの策定が効果的である。

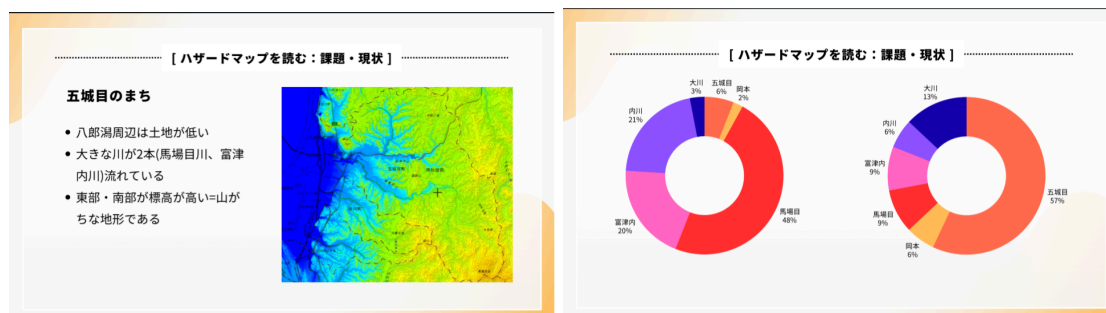
新しいハザードマップは年度中(遅くとも来年梅雨入りまで)に公開される予定である。

このときの「阪神・淡路大震災の際、救助された方のうち20%が公助によるもので、残りの80%は共助によるもの」、ということに驚いた。

自身のwell-beingと重ね合わせると、「社会と関わりを持つことが苦手・できない状態の人でも、社会とのつながりを保てるか」そして、「そのつながりをハザードマップから創出できないか」と考えた。そのため、最終プロジェクトは「ハザードマップを読む」こととした。

・ハザードマップの読み方

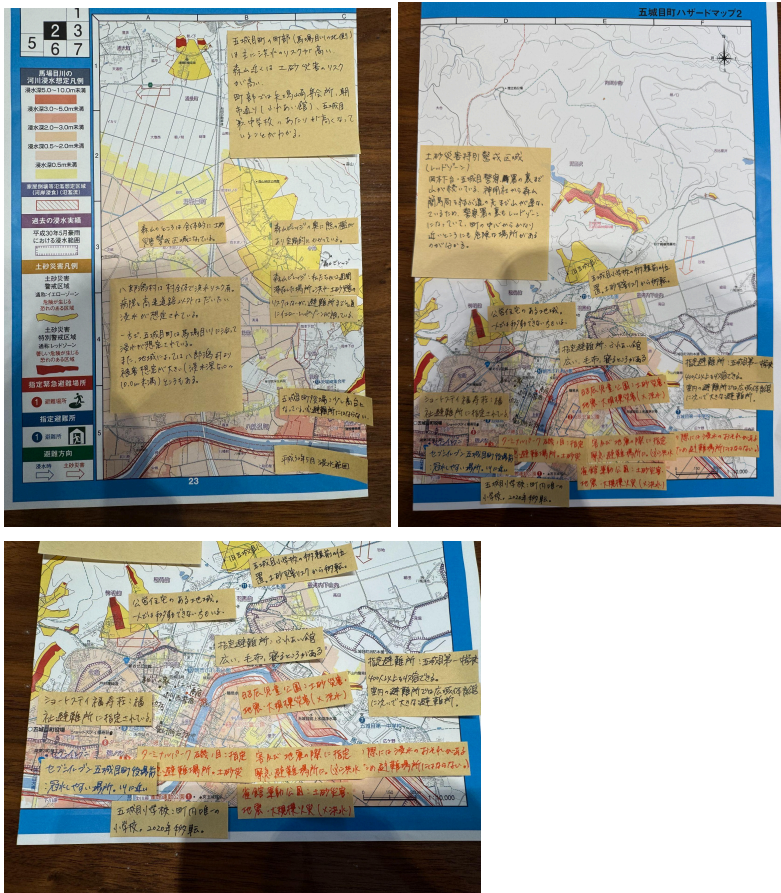
浸水警戒地域にはどんなものがあるか、避難所にはどのような場所に位置しているのか。人の集まりはどこで発生しているのかなど、これまでのフィールドワークでわかったことをハザードマップに重ねていくことにした。



上のように事前学習や追加で調べたデータなどもしようしながらハザードマップを読んでいった。

最初はQGISでオンライン上でハザードマップを重ね合わせ、そこにコメントを足す形にしたいと考えていたが、技術的な問題と、中間報告の際に「インターネットが自由に使えない人・取り残されてしまう人にも配慮しなければならない」というコメントをいただいて、プリントアウトしたハザードマップに付箋で貼り付ける形にした。

完成したものは以下のものになる。



〈プロジェクトを通じた気づき〉

ハザードマップを読むために持っている情報量が不足していると感じた。特に、支援が必要な人がどこにどのくらいいるのか、避難所の設備はどのようになっているのかなどについては実際にもっと滞在して人と関わる必要があると感じた。

また、ハザードマップから読み取れることは意外にも多いことにも驚いた。事前学習で調べていた、西部の土地が低いことや川に沿って氾濫すること、隣の八郎潟村は特に土地が低いので五城目に避難する人もいるのではないかなどのことだけでなく、滞在する中で気がついたことを多く入れることができた。また、実際に期間中に避難をしたことで見えてきたこともある。毛布などの設備が整っているとか土地が高く非常に安全であるなどのことがある。避難したことの無い人にとっては、避難所の環境などは不安要素になりうるので情報として盛り込めてよかった。

〈今後の展望〉

もっと人と関わってどこにどのような人が住んでいるのか、どのような危険な場所・避難所があるのかを知りたい。そして、このハザードマップを更新し続けたいと考えている。

プロジェクトを通じた気づきで述べた通り、ハザードマップを読むには知らないことがかなり多いことに気がついた。定期的に通い、人とのつながりを絶やさないことによって、ハザードマップを更新できたらよいと思う。

また、役場の方のお話でもあったが、今年度～来年度に新たなハザードマップが完成するので、それを元に新たにハザードマップを読んでみることもしてみたいと感じている。

どのような形にせよ、五城目に関わり続け人とのつながりを作っていきたい。

4.2.5. 永田みのり(慶應義塾大学医学部 3年)

永田 「しあわせフォトウォーク」「五城目しあわせコレクション」

〈前半1週間で感じたこと・考えたこと〉

本ワークキャンプの大きなテーマの一つとして、「私にとってのwell-being、五城目町にとってのwell-beingとは何か？」を考えることが挙げられる。前半の1週間は、well-beingを「しあわせ」という言葉に置き換えながら、様々な人や場所と出会う中で生まれた自分の気持ちと向き合う日々だった。

まず、五城目町で1週間過ごす中で、普段東京で過ごしている時よりも多く様々なタイミングでしあわせを感じていることに気がついた。だが、どのような周囲の環境の時にそう感じるのか、しあわせを感じる時に共通点はあるのか、感じる”しあわせ”は毎回同一のものなのかは分からなかった。このことから、私にしあわせを多く感じさせてくれる五城目の地で自分にとっての「しあわせ」とは何かを考えてみたいと感じた。

加えて、五城目町のみなさんが生き生きと笑顔で過ごされている姿を目の当たりにして、その「しあわせ」や「well-being」を支えている要素は何なのか知りたいと感じるようになった。

以上の疑問を解き明かすために、地域診断の手法を参考にできないかと考えた。そこで思いついたのが、自らの足で町を歩きながら写真を撮って仲間と共有するフォトボイスのエッセンスを用いることである。それぞれの人々が「自分にとってのしあわせとは？」という問いを考えながら五城目町を舞台にフォトウォークを行うイベントを実施することを決めた。加えて、当日現地参加することができない住民の方も巻き込んだプロジェクトにするために、「五城目しあわせコレクション」と題して写真の収集を実施することにした。

〈プロジェクトの実施〉

上記のように、プロジェクトは「しあわせフォトウォークin 五城目」と「五城目しあわせコレクション」の2つを同時並行で実施した。以下、各企画の詳細について述べる。

①みんなでしあわせを考えるフォトウォークin五城目

日時: 2025年8月28日(木) 13:30~15:30

場所: 貸し棚おうみや、五城目町朝市通り(写真撮影時)

参加者: 11名

事前準備

・使用するものの作成

当日の企画説明時に用いるスライド、事前に現地に来れない方が送ってくれた写真を地図にまとめた五城目しあわせコレクションを作成した。

・参加者募集

広く本企画の周知をすることはせず、これまで実習に関わってくださった方に声をかける形で参加者を募集した。その結果、学生3名、地域の方々8名が企画に参加してくださった。

企画内容

・参加者への内容説明

この会の企画に至った経緯を説明した後、自分にとっての「しあわせ」とは何かを考える時間をとり、考えたことを2-3人のスモールグループでシェアした。フォトウォークで行ってほしいこと(写真撮影)について伝えた。

・フォトウォーク

朝市通りを約15分間自由に散策し、「しあわせ」を感じた瞬間を写真に収めてきてもらった。写真撮影後はおうみやにて、「しあわせ」の定義と写真への一言コメント(撮影場所、どんなところに「しあわせ」を感じたのか等)を紙に記入してもらった。



・写真シェア会

まず、撮影した写真と写真へのコメントを全体に共有する時間を設けた。その後、発表者への質問やコメントを自由に伝え合った。



・五城目しあわせコレクションの展示

企画終了後は、事前に集まった写真をまとめた五城目しあわせコレクションを展示した。本企画に参加して下さった方々の写真もコレクションに追加していく予定だ。

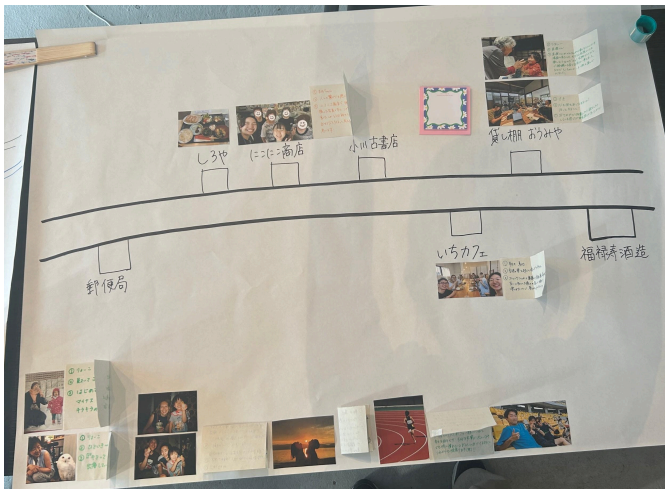


②五城目しあわせコレクション

企画内容

これまで実習に関わって下さった方にメッセージを送り、自分にとっての「しあわせ」の定義と「しあわせ」を感じた写真を送ってもらった。

それらを模造紙に書いた地図の上に貼り、折ってある紙を開くとコメントが読めるようにした。



〈プロジェクトを通じた気づき〉

プロジェクト実施を通じて得た気づきを、しあわせ (well-being) と場づくりという二つの側面から述べたい。

・しあわせ (well-being) とは

「しあわせ」とは、人それぞれであること、変化すること、ひとつではないことを学んだ。

(1) しあわせとは人それぞれである

多くの方に「しあわせ」の定義について尋ねたが、全員がそれぞれ異なる定義を持っていた。しあわせとは、「エネルギーに満ちあふれていることである」、「ホッとできること」、「心が自由自在であること」など、誰1人として同じ定義を持っている人がいなかったことに驚かされた。唯一絶対的な「しあわせ」の定義は存在せず、それぞれの人がこれまでの経験や出会いなどから見出す「しあわせ」があるのだということを感じた。

(2) しあわせは変化する

しあわせは、人によってそれぞれであるだけでなく、同じ人の中でも時間が経過する中で、また異なる環境にいる中で変化するのだということを感じた。五城目に移住してきたある方は、「五城目は前まではじめましての町だったけれど、今は五城目の森山を見ると安心し、「しあわせ」を感じるようになった」という風にお話されていた。五城目が生活の場となり長い時間を過ごしていく中で五城目が心が落ち着く安心できる場所となり、「しあわせ」が変化したのかもしれないと感じた。このように、環境の変化と時間の経過により、「しあわせ」の定義は移り変わっている。

(3)しあわせはひとつではない

また、しあわせを感じる瞬間は一つではなく、感じるしあわせの種類も様々だった。例えば、好きな芸能人に会うことで生まれる”キラキラした”しあわせもあれば、地域の人とつながり会話している時に感じる”じんわりとあたたかい”しあわせもある。どちらの瞬間も最終的に「しあわせ」という言葉で表現されるが、その中身や過程はひとつではないことを学んだ。

また、以上のことを考察する過程で、自分の「しあわせ」と五城目の「しあわせ」がつながっていることに気がついた。前半1週間の期間は、自分と五城目にとってのwell-beingをそれぞれ別のものとしてそれぞれに対する答えを見つけようと考えていた。しかし、自分が感じる「しあわせ」と五城目は切り離すことができず、また、五城目の「しあわせ」もまた自分の「しあわせ」を含んでいるかもしれないと感じるようになった。例えば、私は人とのつながりを感じる時にしあわせを感じたが、そこにはつながりを持ってくださる五城目の方々の存在が欠かせない。また、こうして初めて五城目を訪れた外の人に対してもつながりを持ってくださるのには、五城目がこれまで培ってきた土地の風土や雰囲気も関わっていると感じる。加えて、ある五城目の住民方が「こうやって住民だけではない色々な人が五城目に来てくれること、お話しできることがしあわせ」とおっしゃっていた。この言葉を聞いて、今自分が五城目にいることも五城目の「しあわせ」の一部になっているのかもしれないと思うようになった。

このように、自分と五城目にとっての「しあわせ」が混ざり合っており、互いに影響を与え合っていることを感じる事ができた。

〈今後の展望〉

・デジタルマップの作成

今回行った2つの企画は、参加者と地域が限られてしまっていた。そのため、今後はより多くの人に声をかけて五城目の中心地を超えた広い地域から「しあわせ」を集め、共有してみたいと考えている。

そこで、Google my map を活用したデジタルマップの作成を開始した。デジタルマップを活用することで多くの人と場所の写真を反映できるようになる他、五城目に居住していない私も継続的に作成に関わることができる。また、共同編集を可能にし地域の方々と一緒にマップを作り上げていくことも考えている。

今回の実習だけで終わるのではなく、持続的な取り組みにすることができたらと考えている。

4.2.6. 細井真加 (宇都宮大学 地域デザイン科学部 4年)

4.2.7. 堀元嶺 (慶應義塾大学理工学部 3年)

・堀元 「五城目コミュニティMAP」

<前半一週間からのアクションプラン>

プログラム参加初期の1週間(INPUTの時間)において、五城目町の風景やコミュニティを体験的に理解する中で、町が抱える具体的な課題とその解決につながる可能性を考察した。

主要な課題として、移動手段の不足を訴える住民が多いという現状を確認した。この移動手段の制約と物理的な距離の遠さが複合し、人々の集まりを消極的にさせ、結果として地区ごとのつながりを希薄化させているのではないかという仮説を立てた。

一方で、新たな人やイベントに参加する体験から「出会いの中の幸せ」を実感し、コミュニティやイベントが活性化することで、町民全体の幸福度が向上するのではないかという解決の方向性を見出した。

これらの気づきに基づき、アクションプランの目標を「移動手段の少なさや距離によって行き詰まっている五城目町全体の情報と交流を活性化させる」と設定した。

この目標を達成するための具体的かつ最適な手段として、「MAPづくり」を選択した。MAPは物理的な距離の制約を情報によって超越し、人々が「集まる場所」を可視化することで、交流の停滞を打破すると考えた。

MAPづくりの初期目的は以下の2点に集約される。

- ① 集まれる場所を周知しコミュニティの形成を促す: 公民館などの交流拠点の情報を共有し、人々の自発的な集まりを後押しする。
- ② コミュニティへの参加やコミュニティ同士のつながりを促す: 既存の集まりや新たなコミュニティ間の交流を促進し、町全体の関係性を強化する。

<プロジェクトの実施>

MAPづくりにおいて、コミュニティの発生・集合場所として公民館が重要な拠点となるという仮説に基づき、以下の具体的なアクション計画を実行した。

1. 調査対象の設定と巡回

コミュニティが集まれる場所を特定・周知するため、指定管理者制度によって運営される6つの公民館と町民センター(+α)を巡るフィールドワークを実施した。

2. コミュニティの実態調査と学習

単なる施設の場所確認に留まらず、各公民館の館長へのインタビューや活動の視察を通じて、コミュニティが実際にどのように発生し、継続しているのかを調査した。

3. コミュニティへの参加

許可を得られたコミュニティ活動には実際に参加し、参加を通じて町民のつながり方や運営方法などについての情報を収集した。

実際に活動した日程表を以下に示す。

日程	概要
8/25	・ニコニコ商店 ・五城目朝市ふれあい館 ・役場訪問(まちづくり課)
8/26	・役場訪問(防災課) ・みせっこあさみない ・内川地区公民館
8/27	・富津内地区公民館 ・馬川地区公民館 ・水沢地区町内会長宅 ・町民センター ・大川地区公民館
8/28	・ふよう会(富津内地区公民館) ・ハーモニカ同好会(大川地区公民館) ・町民センター

8/29	・最終報告会準備
8/30	・最終報告

日程表に記載した、各施設の概要を以下に示す。

・ニコニコ商店

五城目朝市通りに位置する商店で、野菜から文房具、化粧品まで幅広く販売している。女性の店主が一人で経営しており、もともとは薬局であった。五城目町の高齢化や人口減少により、人通りが少なくなっていく朝市通りを憂い、薬局を閉じた後も人々の集いの場として商店を続けている。

商店を運営している女性の店主は高齢でありながらも毎日休みなく開店していて、店には朝市の出展者や近所の人々が集まり、名前もないコミュニティが形成されている

・五城目朝市ふれあい館

開館時間は8:00～17:00で休館日は朝市のない月曜日。設備は、多目的ホール(100～150名収容目安)、会議室、調理室、展示スペース、駐車場(車いす用等含む)があり、館内に五城目朝市の歴史写真・資料の展示がある。

常に一人は職員がおり、暖冷房設備・椅子・机が揃った休憩所が存在する。休憩所の利用は無料で自由に出入りでき、人々が集まるには最適な場所だとおもわれるが利用する人間はごく少数である。

・みせっこあさみない

開館時間は平日(原則)月～金 10:00～16:00で、定休日は土日祝。小規模な地域店舗・飲食系の施設で席数は16である。

小規模な商店で日用品などを販売している。浅見内地区の町内会などの集合場所として利用されるなど、人々が日常的に集まる場である。五城目町の中心部とは数kmも離れた地域で、普段は他地域との交流がほとんどないが、朝市が開催される際には中心部に赴き野菜などを販売する。

・内川地区公民館

内川地域の公民館(内川総合生きがいセンター)は生涯学習の拠点として俳句・木工・押し花等の教室が開かれ、体育館利用が可能。もともとは宿泊施設であったこの施設は、畳の大広間があるなど集会場所として適していると共に廃校と接続した立地で災害時の避難場所としても活用できる。

・富津内地区公民館

開館時間は8:30～21:00で休館日は月曜である。施設にはホール、体育館、和室(大・小)等の設備が存在し、避難場所として指定されている。後述するふよう会(陶芸会)などのコミュニティが存在し、週に2, 3回程度の頻度で何かしらの活動が行われる。

・馬川地区公民館

他地域の公民館と同様に、和室やホールがあり、会議・集会場所として利用されている。現会長の体調不良のため営業日は不定期で、地域の婦人サロンが代わりに館に在中し管理している。

・水沢地区町内会長宅

水沢地区の町内会長の自宅。水沢地区は十数世帯の小さな地区で、一世帯だけ核家族が存在する。人口がすくなく小さな地区のため、町内会の活動も道や水路の掃除などといった暮らしに必要な町の整備的な活動が多い傾向である。

・町民センター

開館時間は平日・休日とも 9:00～21:00で、休館日は12/29～1/3である。体育館、町民ホール（約297.5㎡・大規模ホール）、会議室、和室（宿泊研修室含む）、浴室・洗面所、図書室、屋内温水プール等（施設の各室・利用料金等は町の案内で公開）などの設備があり、宿泊利用することも可能。施設の隣には大きなグランドゴルフ場があり、クラブをレンタルすることが可能な他、地域対抗の大会などが開催される。

大規模な施設であるため、昔から五城目町の大きなイベントで利用されることが多く、過去には成人式や結婚式の開催場所であった。

・大川地区公民館

開館時間は8:30～17:00で休館日は月曜日である。他地域と同様に和室やホールがあり、会議・集会場所として利用されている。

館長が町内コミュニティの活発化に積極的で訪れた公民館のなかで最も利用の予約が盛んであった。

・ふよう会（富津内地区公民館）

週に1～2回程度開催される陶芸会で、女性のみで構成される。もともとは陶芸教室の集まりであったが、教室の先生が活動を終えた後も生徒たちが交流を続けふよう会として現存している。

・ハーモニカ同好会（大川地区公民館）

週に1回程度の頻度で開催される会で、会員は15人程度、普段はハーモニカの練習をしている。もともとは町役場主導で地域活性化のため結成された会で、役場が手を引いたのちも会員たちによって維持されている。

これらのフィールドワークから作成したMAPを以下に示す。



MAPには[位置関係、概要、魅力]の情報と実際にその場で撮影し掲載許可を頂いた写真を記載した。五城目町全体を載せられるように縮尺を変えているので正確な地図ではないが、問題点だと考えている物理的な距離を超えて町全体のつながりを感じてもらえるのではないかと考えた。

日程表に示したように約4日間を通して五城目町を巡ったが、訪れることができたのは数個のコミュニティで、五城目町全体からしたらほんの一部であった。十分に町を巡ることができなかった要因としては、日数が足りなかったことやそれぞれのコミュニティ間が物理的に離れており、移動手段がタクシーしかないことが考えられる。また、この地図は私の視点からコミュニティを観察し魅力を記載したもので、どちらかという地域の人に向けたものより外部の人間に向けたものとなった。地域住民の視点を取り入れることでより内部間でのつながりを意識したものとなると考えられ、そのためには地図の作成時に住民の方々と一緒に作成するワークショップを開催することが有効だと思われる。

<プロジェクトを通じた気づき>

実際に町内の公民館などを巡り、様々なコミュニティ活動に参加する中で、当初の仮説が実態とは異なることが明らかになった。町には、助け合いや地域活性化、日々の生活の共有といった、多様で強力なコミュニティが既に存在していたのである。各地区には独自の特色と強いつながりがあり、住民は既に「五城目町の住人」という意識でつながっていた。多くの住民は既存のコミュニティに満足と幸せを感じており、地区間の新たな交流の必要性は必ずしも高くないと判断された。

五城目町を流れる川は川幅が狭く、これまでに何度も氾濫を繰り返してきた。そのため、この地域では水害への不安が根強い。今回訪れた場所では、指定された避難所が遠く、災害時には「避難を諦める」と話す住民もいた。一方で、防災意識が高い地域も見られた。そのような地域では、町内会などの地域コミュニティ活動が活発で、住民同士の交流が日常的に行われていた。このことから、地域コミュニティの存在が防災意識を高め、町の防災力向上につながっていることが分かった。

4.2.8. 小田切優奈(秋田大学医学部 1年)

5. 発表資料

5.1. 中間報告会

中間報告会で発表した資料を以下に示す。報告会の内容は、初めに本実習の目的・概要について説明し、実習が始まる前に行ったCAPモデルに基づく事前調査の情報の共有とそこから考察した問題・課題について発表した。その後、実際に一週間での実習を通して行った仮説の検証と実習中での気づきを各個人ごとに発表した。

地域づくりワークキャンプ2025 中間発表

上田真士 (秋田大学医学部 2年) 永田みのり (慶應義塾大学医学部 3年)
 溝井鉄樹 (慶應義塾大学看護医療学部 2年) 船井真知 (千都市立大学 地域デザイン科学部 4年)
 加藤のどか (国際教養大学国際教養学部 2年) 坂本 優 (慶應義塾大学理工学部 3年)
 中沢遥花 (慶應義塾大学環境情報学部 2年) 小田切真衣 (秋田大学医学部 1年)

目次

1. 実習の目的
2. 地域診断とは？
3. 事前の情報収集：CAPモデル
4. フィールドワークで感じたこと

実習の目的

五城目町のことを学ぶことを通して、
医療や健康、幸せなど
「Well-being」
の概念について考えを深める。

地域診断とは

「目的に沿って地域の様々な情報を収集し、地域全体の健康課題を分析すること」
「保健活動、地区踏査、調査研究、統計情報などに基づき住民の健康状態や生活実態を把握して、地域において取り組むべき課題、その構成要素と要因を明らかにすること。」

→ 医療現場の見学
町を歩き住民のみなさんからお話を聞く
「データを調べることから五城目のいいところ・もつとよくなったらしいところを発見する！」

Step1: 既存情報を集める

Step2: 情報を分析、課題の特定

Step3: 仮説を立てる

Step4: 街歩き、ヒアリング

Step5: アクションプラン

【STEP1】

コミュニティーズパートナーモデル

～9つの項目から町を知る～

CAPモデル (一部)

まちの概要

- コミュニティコア：人口、歴史、民族性、価値観
- サテライトシステム：物理的環境：自然、緑地、住宅、水環境
教育：学校、図書館、課外活動、習い事
交通と安全：交通機関、歩きやすさ
政治と行政：市議会、役所へのアクセス
保健医療と社会福祉：医療機関、施設、包括コミュニケーションと情報
経済：産業、仕事、実業家、商店、スーパー
レクリエーション：遊び場

成り立ち

昭和の大合併で誕生し、途中周囲の町を編入して平成の大合併では合併せず今に至る。

- 旧五城目町
- 旧馬場目村
- 旧富津内村
- 旧内川村
- 旧大川村
- 旧面湯村の一部

面積

面積は約215km²

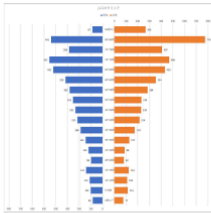
県内17位

順位	市町村	面積(km ²)
1	伊予市	1,187.52
2	由緒市	1,030.59
3	宇津川町	1,112.26
4	大洲市	813.22
5	新居町	898.07
6	大分市	888.79
7	喜多町	792.01
8	東予市	757.52
9	喜多町	622.28
10	新居町	494.05
11	東予市	382.73
12	上野市	378.72
13	三浦町	347.00
14	新居町	291.12
15	喜多町	274.84
16	新居町	254.82
17	新居町	254.82
18	新居町	254.82
19	新居町	254.82
20	新居町	254.82
21	新居町	254.82
22	新居町	254.82
23	新居町	254.82
24	新居町	254.82
25	新居町	254.82
26	新居町	254.82
27	新居町	254.82
28	新居町	254.82
29	新居町	254.82
30	新居町	254.82

基本情報

人口と人口ピラミッド

性別	年齢	人口
男	0歳	100
男	1歳	100
男	2歳	100
男	3歳	100
男	4歳	100
男	5歳	100
男	6歳	100
男	7歳	100
男	8歳	100
男	9歳	100
男	10歳	100
男	11歳	100
男	12歳	100
男	13歳	100
男	14歳	100
男	15歳	100
男	16歳	100
男	17歳	100
男	18歳	100
男	19歳	100
男	20歳	100
男	21歳	100
男	22歳	100
男	23歳	100
男	24歳	100
男	25歳	100
男	26歳	100
男	27歳	100
男	28歳	100
男	29歳	100
男	30歳	100
男	31歳	100
男	32歳	100
男	33歳	100
男	34歳	100
男	35歳	100
男	36歳	100
男	37歳	100
男	38歳	100
男	39歳	100
男	40歳	100
男	41歳	100
男	42歳	100
男	43歳	100
男	44歳	100
男	45歳	100
男	46歳	100
男	47歳	100
男	48歳	100
男	49歳	100
男	50歳	100
男	51歳	100
男	52歳	100
男	53歳	100
男	54歳	100
男	55歳	100
男	56歳	100
男	57歳	100
男	58歳	100
男	59歳	100
男	60歳	100
男	61歳	100
男	62歳	100
男	63歳	100
男	64歳	100
男	65歳	100
男	66歳	100
男	67歳	100
男	68歳	100
男	69歳	100
男	70歳	100
男	71歳	100
男	72歳	100
男	73歳	100
男	74歳	100
男	75歳	100
男	76歳	100
男	77歳	100
男	78歳	100
男	79歳	100
男	80歳	100
男	81歳	100
男	82歳	100
男	83歳	100
男	84歳	100
男	85歳	100
男	86歳	100
男	87歳	100
男	88歳	100
男	89歳	100
男	90歳	100
男	91歳	100
男	92歳	100
男	93歳	100
男	94歳	100
男	95歳	100
男	96歳	100
男	97歳	100
男	98歳	100
男	99歳	100
男	100歳	100
女	0歳	100
女	1歳	100
女	2歳	100
女	3歳	100
女	4歳	100
女	5歳	100
女	6歳	100
女	7歳	100
女	8歳	100
女	9歳	100
女	10歳	100
女	11歳	100
女	12歳	100
女	13歳	100
女	14歳	100
女	15歳	100
女	16歳	100
女	17歳	100
女	18歳	100
女	19歳	100
女	20歳	100
女	21歳	100
女	22歳	100
女	23歳	100
女	24歳	100
女	25歳	100
女	26歳	100
女	27歳	100
女	28歳	100
女	29歳	100
女	30歳	100
女	31歳	100
女	32歳	100
女	33歳	100
女	34歳	100
女	35歳	100
女	36歳	100
女	37歳	100
女	38歳	100
女	39歳	100
女	40歳	100
女	41歳	100
女	42歳	100
女	43歳	100
女	44歳	100
女	45歳	100
女	46歳	100
女	47歳	100
女	48歳	100
女	49歳	100
女	50歳	100
女	51歳	100
女	52歳	100
女	53歳	100
女	54歳	100
女	55歳	100
女	56歳	100
女	57歳	100
女	58歳	100
女	59歳	100
女	60歳	100
女	61歳	100
女	62歳	100
女	63歳	100
女	64歳	100
女	65歳	100
女	66歳	100
女	67歳	100
女	68歳	100
女	69歳	100
女	70歳	100
女	71歳	100
女	72歳	100
女	73歳	100
女	74歳	100
女	75歳	100
女	76歳	100
女	77歳	100
女	78歳	100
女	79歳	100
女	80歳	100
女	81歳	100
女	82歳	100
女	83歳	100
女	84歳	100
女	85歳	100
女	86歳	100
女	87歳	100
女	88歳	100
女	89歳	100
女	90歳	100
女	91歳	100
女	92歳	100
女	93歳	100
女	94歳	100
女	95歳	100
女	96歳	100
女	97歳	100
女	98歳	100
女	99歳	100
女	100歳	100

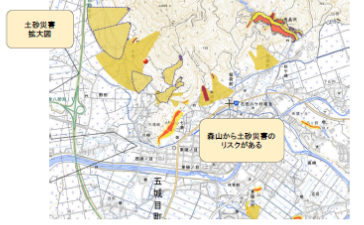
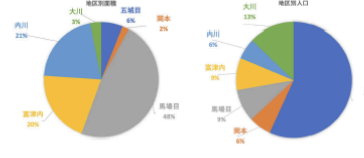
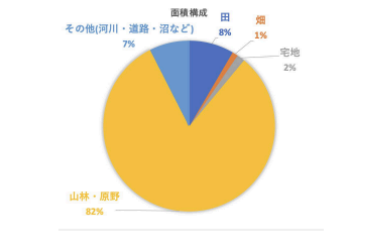
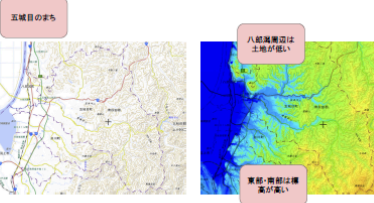


人口減少率(左:全市市町村比較、右:県内市町村比較)

令和6年 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数

順位	市町村	減少率
1	伊予市	-0.84
2	由緒市	-0.88
3	宇津川町	-0.90
4	大洲市	-0.92
5	新居町	-0.93
6	新居町	-0.94
7	新居町	-0.95
8	新居町	-0.96
9	新居町	-0.97
10	新居町	-0.98
11	新居町	-0.99
12	新居町	-1.00
13	新居町	-1.01
14	新居町	-1.02
15	新居町	-1.03
16	新居町	-1.04
17	新居町	-1.05
18	新居町	-1.06
19	新居町	-1.07
20	新居町	-1.08
21	新居町	-1.09
22	新居町	-1.10
23	新居町	-1.11
24	新居町	-1.12
25	新居町	-1.13
26	新居町	-1.14
27	新居町	-1.15
28	新居町	-1.16
29	新居町	-1.17
30	新居町	-1.18

地理的環境



フィールドワークで感じたこと

- 町の中心部は西部にあり、人も西部に住んでいる
- 町内が地理的な距離の割に心理的な距離が離れており、雑居の懸念がもたらされる
- 大雨が降ると、土砂災害のリスクが高まる
- 森山ヴィレッジのあたりは緑も美しい。
- 鳥が出る
- 町中どこでも出る可能性があるのは驚き。

健康と社会福祉

ショートステイがやき見学

- 年単位の長期滞在の方がほとんど、5年ほど利用している人も。
- 病院に送院する利用者の送迎、付き添いも行う。(家族が付き添うのが望ましいが、送迎難、多忙、独居などで難しいことも)
- 利用者の状態は、平均すると要介護3。
- 家にいる感覚で生活できるよう心がけている。(家で行っていたケアを継続し、希望を探り入れる。)
- 専属の相談員がいる。(利用者、家族が安心して何でも話せる関係を築く。)
- コロナを経て、外部との交流が希薄に。
- 子、孫との面会を楽しみにしている利用者も。
- 「普段日常生活をしているときに幸せを感じる」

保健医療・福祉



訪問診療同行(湖東厚生病院)

- 水、金曜日午後訪問診療を行っている。患者さん430人(減少中)。
- 認知症になったり足腰が悪くなったりして送院できなくなった人を訪問。
- 内科の先生で訪問診療を担う。
- きれいで快適な介護施設で過ごすのか、環境は整ってなくても住み慣れた自宅で訪問診療を受けながら過ごすのか、一概にどちらがよいと義えない。
- 患者さんその家族の不安を聞いて、安心して生活できるようにする。
- 食事や薬の飲み方など、生活のしかたを制限するのではなく、ある程度許容する。
- 連絡先「声にならない声」を聞くようにしている。

経済

経済 1. インターネットを使った情報収集

労働力率減少(52.5%)

かつては農業、林業、木工などがさかんであった。

木工品が有名だったが、生活様式の変化によって、需要が低迷している。

経済 4. インタビュー・町歩き

五城目には仕事がない人が多い。

今でも思ったより中心部は様々なお店がそろっている印象。日用品だけであれば、車がなくても事足りるかも。しかし、昔はもともと五城目でことが足りてしまいうらい楽えていた。(スーパー、薬局、病院がたくさんあった)

農家さんの跡継ぎがない。

経済 (産業・仕事・失業率・スーパー(商店))

1. インターネットを使った情報収集
2. 情報の分析、課題・問題の特定
3. 仮説
4. インタビュー・町歩き
5. 解決策、これらに向けて

経済 2. 情報の分析、課題・問題の特定

労働力が少ないということは、働き口が少ない、高齢の方が多いということなのではないか。

若い働き盛りの人ではなく、高齢の方が町に出ていることが多い。

経済 4. インタビュー・町歩き

若い人や移住者が新しいことをしているが、離れたところに住んでいる人にとっては、何をしているか分からないと思う面もある。新しい物があっても、見に行く足がない。

経済 3. 仮説

五城目町には、新たな産業が必要なのではないか。

産業を振興するために働く若い人が増える必要があるのではないかと。

経済 5. 解決策、これらに向けて

五城目の外に目を向けることが必要なのではないか。

五城目の人口が減少していることから、五城目内の需要の増加は厳しいかも。五城目の中だけを対象としたビジネスには限りがある。五城目と秋田、日本各地、世界をつなぐということに可能性があるのかもしれない。

交通と安全

交通 ① 鉄道・高速道路



五城目町内に駅はなく、まちの暮らし駅は八部湯駅である。西側には高速道路、JRの鉄道が通っているが、東側には通っていない。

② バス・タクシー

- ・広域路線バス
3町村の観光施設や商業施設、駅、病院などを結んでいる
- ・デマンド型乗合タクシー
馬場目線・富津内線・森山線・内川線



図 広域デマンド型乗合タクシー

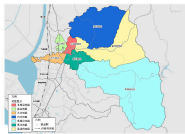
③ 公共交通のみで対応しきれない移動需要に対する他の輸送資源の活用



図 患者搬送サービス(わしや油科医院)

- ・五城目町では路線バス・乗合タクシーなどの複数の公共交通により、町民の生活の移動手段を確保しているが、郊外部におけるエリアが広いことからサービスを提供しきれない公共交通空白地域も発生。
- ・このため、町内の輸送資源を有効活用や公共交通との役割分担を認りつつ、可能な範囲で輸送資源を組み合わせることで、各地域における移動手段の適切な確保が求められる。

④ 五城目町地域公共交通計画 令和4年3月



- ・五城目地区、森山地区、大川地区、内川地区、馬場目地区、馬川地区、富津内地区の地区に区別されている。

<https://www.town.gojome.akita.jp/up/file/s/town/sosikiannai/machi/matiduku/mao/hikouyokoutsukeikakuR4-R8.pdf>

【計画の対象となる交通手段】

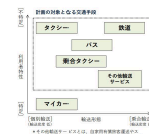


図 対象となる交通手段

【課題】

1. 人口減少・高齢化の進展に対応した地域公共交通機関の維持
2. 中心市街地を含む公共交通機関の解消
3. 公共交通機関の乗継利便性の確保、交通結節点の解消
4. 地域特性に応じた多様な交通サービスの提供
5. 情報提供・発信体制の整備
6. 新たな技術の有効活用

4. 公共交通の課題とあるべき姿
4-1 公共交通の課題とあるべき姿
4-2 公共交通の課題とあるべき姿
4-3 公共交通の課題とあるべき姿
4-4 公共交通の課題とあるべき姿
4-5 公共交通の課題とあるべき姿
4-6 公共交通の課題とあるべき姿
4-7 公共交通の課題とあるべき姿
4-8 公共交通の課題とあるべき姿
4-9 公共交通の課題とあるべき姿
4-10 公共交通の課題とあるべき姿
4-11 公共交通の課題とあるべき姿
4-12 公共交通の課題とあるべき姿
4-13 公共交通の課題とあるべき姿
4-14 公共交通の課題とあるべき姿
4-15 公共交通の課題とあるべき姿
4-16 公共交通の課題とあるべき姿
4-17 公共交通の課題とあるべき姿
4-18 公共交通の課題とあるべき姿
4-19 公共交通の課題とあるべき姿
4-20 公共交通の課題とあるべき姿
4-21 公共交通の課題とあるべき姿
4-22 公共交通の課題とあるべき姿
4-23 公共交通の課題とあるべき姿
4-24 公共交通の課題とあるべき姿
4-25 公共交通の課題とあるべき姿
4-26 公共交通の課題とあるべき姿
4-27 公共交通の課題とあるべき姿
4-28 公共交通の課題とあるべき姿
4-29 公共交通の課題とあるべき姿
4-30 公共交通の課題とあるべき姿
4-31 公共交通の課題とあるべき姿
4-32 公共交通の課題とあるべき姿
4-33 公共交通の課題とあるべき姿
4-34 公共交通の課題とあるべき姿
4-35 公共交通の課題とあるべき姿
4-36 公共交通の課題とあるべき姿
4-37 公共交通の課題とあるべき姿
4-38 公共交通の課題とあるべき姿
4-39 公共交通の課題とあるべき姿
4-40 公共交通の課題とあるべき姿
4-41 公共交通の課題とあるべき姿
4-42 公共交通の課題とあるべき姿
4-43 公共交通の課題とあるべき姿
4-44 公共交通の課題とあるべき姿
4-45 公共交通の課題とあるべき姿
4-46 公共交通の課題とあるべき姿
4-47 公共交通の課題とあるべき姿
4-48 公共交通の課題とあるべき姿
4-49 公共交通の課題とあるべき姿
4-50 公共交通の課題とあるべき姿
4-51 公共交通の課題とあるべき姿
4-52 公共交通の課題とあるべき姿
4-53 公共交通の課題とあるべき姿
4-54 公共交通の課題とあるべき姿
4-55 公共交通の課題とあるべき姿
4-56 公共交通の課題とあるべき姿
4-57 公共交通の課題とあるべき姿
4-58 公共交通の課題とあるべき姿
4-59 公共交通の課題とあるべき姿
4-60 公共交通の課題とあるべき姿
4-61 公共交通の課題とあるべき姿
4-62 公共交通の課題とあるべき姿
4-63 公共交通の課題とあるべき姿
4-64 公共交通の課題とあるべき姿
4-65 公共交通の課題とあるべき姿
4-66 公共交通の課題とあるべき姿
4-67 公共交通の課題とあるべき姿
4-68 公共交通の課題とあるべき姿
4-69 公共交通の課題とあるべき姿
4-70 公共交通の課題とあるべき姿
4-71 公共交通の課題とあるべき姿
4-72 公共交通の課題とあるべき姿
4-73 公共交通の課題とあるべき姿
4-74 公共交通の課題とあるべき姿
4-75 公共交通の課題とあるべき姿
4-76 公共交通の課題とあるべき姿
4-77 公共交通の課題とあるべき姿
4-78 公共交通の課題とあるべき姿
4-79 公共交通の課題とあるべき姿
4-80 公共交通の課題とあるべき姿
4-81 公共交通の課題とあるべき姿
4-82 公共交通の課題とあるべき姿
4-83 公共交通の課題とあるべき姿
4-84 公共交通の課題とあるべき姿
4-85 公共交通の課題とあるべき姿
4-86 公共交通の課題とあるべき姿
4-87 公共交通の課題とあるべき姿
4-88 公共交通の課題とあるべき姿
4-89 公共交通の課題とあるべき姿
4-90 公共交通の課題とあるべき姿
4-91 公共交通の課題とあるべき姿
4-92 公共交通の課題とあるべき姿
4-93 公共交通の課題とあるべき姿
4-94 公共交通の課題とあるべき姿
4-95 公共交通の課題とあるべき姿
4-96 公共交通の課題とあるべき姿
4-97 公共交通の課題とあるべき姿
4-98 公共交通の課題とあるべき姿
4-99 公共交通の課題とあるべき姿
4-100 公共交通の課題とあるべき姿

【基本方針】

地域住民が主体となり、公共交通事業者、行政等関係者と協働・連携のもと、誰もが安心して利用しやすい交通環境を実現し、住民の自立した日常生活を支えるとともに、地域間交流を促進する拠点づくりを進め、にぎわいあふれるまちの実現を図ります。

～町の活力を支える 将来にわたって持続可能な 地域公共交通の構築～



南秋地域の公共交通マスタープラン

- (1) 公共交通再編プロジェクト
- (2) 交通環境づくりプロジェクト
- (3) 利用促進プロジェクト
- (4) 多様な主体との連携・協働プロジェクト

南秋地域の公共交通マスタープラン
1. 南秋地域の公共交通マスタープラン
2. 南秋地域の公共交通マスタープラン
3. 南秋地域の公共交通マスタープラン
4. 南秋地域の公共交通マスタープラン
5. 南秋地域の公共交通マスタープラン
6. 南秋地域の公共交通マスタープラン
7. 南秋地域の公共交通マスタープラン
8. 南秋地域の公共交通マスタープラン
9. 南秋地域の公共交通マスタープラン
10. 南秋地域の公共交通マスタープラン
11. 南秋地域の公共交通マスタープラン
12. 南秋地域の公共交通マスタープラン
13. 南秋地域の公共交通マスタープラン
14. 南秋地域の公共交通マスタープラン
15. 南秋地域の公共交通マスタープラン
16. 南秋地域の公共交通マスタープラン
17. 南秋地域の公共交通マスタープラン
18. 南秋地域の公共交通マスタープラン
19. 南秋地域の公共交通マスタープラン
20. 南秋地域の公共交通マスタープラン
21. 南秋地域の公共交通マスタープラン
22. 南秋地域の公共交通マスタープラン
23. 南秋地域の公共交通マスタープラン
24. 南秋地域の公共交通マスタープラン
25. 南秋地域の公共交通マスタープラン
26. 南秋地域の公共交通マスタープラン
27. 南秋地域の公共交通マスタープラン
28. 南秋地域の公共交通マスタープラン
29. 南秋地域の公共交通マスタープラン
30. 南秋地域の公共交通マスタープラン
31. 南秋地域の公共交通マスタープラン
32. 南秋地域の公共交通マスタープラン
33. 南秋地域の公共交通マスタープラン
34. 南秋地域の公共交通マスタープラン
35. 南秋地域の公共交通マスタープラン
36. 南秋地域の公共交通マスタープラン
37. 南秋地域の公共交通マスタープラン
38. 南秋地域の公共交通マスタープラン
39. 南秋地域の公共交通マスタープラン
40. 南秋地域の公共交通マスタープラン
41. 南秋地域の公共交通マスタープラン
42. 南秋地域の公共交通マスタープラン
43. 南秋地域の公共交通マスタープラン
44. 南秋地域の公共交通マスタープラン
45. 南秋地域の公共交通マスタープラン
46. 南秋地域の公共交通マスタープラン
47. 南秋地域の公共交通マスタープラン
48. 南秋地域の公共交通マスタープラン
49. 南秋地域の公共交通マスタープラン
50. 南秋地域の公共交通マスタープラン
51. 南秋地域の公共交通マスタープラン
52. 南秋地域の公共交通マスタープラン
53. 南秋地域の公共交通マスタープラン
54. 南秋地域の公共交通マスタープラン
55. 南秋地域の公共交通マスタープラン
56. 南秋地域の公共交通マスタープラン
57. 南秋地域の公共交通マスタープラン
58. 南秋地域の公共交通マスタープラン
59. 南秋地域の公共交通マスタープラン
60. 南秋地域の公共交通マスタープラン
61. 南秋地域の公共交通マスタープラン
62. 南秋地域の公共交通マスタープラン
63. 南秋地域の公共交通マスタープラン
64. 南秋地域の公共交通マスタープラン
65. 南秋地域の公共交通マスタープラン
66. 南秋地域の公共交通マスタープラン
67. 南秋地域の公共交通マスタープラン
68. 南秋地域の公共交通マスタープラン
69. 南秋地域の公共交通マスタープラン
70. 南秋地域の公共交通マスタープラン
71. 南秋地域の公共交通マスタープラン
72. 南秋地域の公共交通マスタープラン
73. 南秋地域の公共交通マスタープラン
74. 南秋地域の公共交通マスタープラン
75. 南秋地域の公共交通マスタープラン
76. 南秋地域の公共交通マスタープラン
77. 南秋地域の公共交通マスタープラン
78. 南秋地域の公共交通マスタープラン
79. 南秋地域の公共交通マスタープラン
80. 南秋地域の公共交通マスタープラン
81. 南秋地域の公共交通マスタープラン
82. 南秋地域の公共交通マスタープラン
83. 南秋地域の公共交通マスタープラン
84. 南秋地域の公共交通マスタープラン
85. 南秋地域の公共交通マスタープラン
86. 南秋地域の公共交通マスタープラン
87. 南秋地域の公共交通マスタープラン
88. 南秋地域の公共交通マスタープラン
89. 南秋地域の公共交通マスタープラン
90. 南秋地域の公共交通マスタープラン
91. 南秋地域の公共交通マスタープラン
92. 南秋地域の公共交通マスタープラン
93. 南秋地域の公共交通マスタープラン
94. 南秋地域の公共交通マスタープラン
95. 南秋地域の公共交通マスタープラン
96. 南秋地域の公共交通マスタープラン
97. 南秋地域の公共交通マスタープラン
98. 南秋地域の公共交通マスタープラン
99. 南秋地域の公共交通マスタープラン
100. 南秋地域の公共交通マスタープラン

まちの声とフィールドワークで感じたこと

- ・車がいない生活が難しい。免許返納後の生活に不安がある。
- ・乗合タクシーあまり使っていない
- ・町内に駅がないため、五城目町が楽しめるのは難しいのでは？(「駅がある町は 乗える」という考えより)
- ・夏祭りの際「お酒を飲むのに足がないことが改善点のひとつになっていた
- 交通の不便さが町内交流の障壁となっているかもしれない
- ・公共交通機関の使い方が難しい

②大雨・河川の氾濫

- ・大雨による河川の氾濫で、度々多くの住宅が浸水被害に遭っている。五城目町。
- ・大雨が降れば土砂災害の可能性もある
- ・秋田県では馬場目川・富津内川・内川川に関する新たな整備計画の策定を進めている

安全

①ツキノワグマ出没に関する注意報



- ・「近年では、山林付近のみならず、**市街地周辺でも出没する事例が増加**しており、今まで出没のなかった地域でも警戒する必要があります。朝晩の薄暗い時間帯に散歩や農作業などをされる際は特に注意が必要です。」
- ・ツキノワグマ等情報マップシステム「クマガス」

まちの声とフィールドワークで感じたこと

- ・やっぱりクマ怖い
- ・クマの出没により生活や行事が制限されてしまう
- ・森山での高校の全校登山の中止
- ・益譲りができない
- ・日常生活ではクマ動体いづら(クマ慣れしてる?)
- ・クマとの物理的距離が近い。生活圏内でクマが出ている。
- ・クマの存在が日常

2023年 秋田県豪雨

- ・五城目町では内川川、馬場目川が氾濫。
- ・秋田県の中でもかなり被災した地域。



まちの声

- ・2年前の大雨から、大雨に敏感になった気がする。
- ・フィールドワーク中に会った町の方の多くから、2年前の大雨のことについて 耳にした
- ・先日の大雨では避難者が少なかった
- 災害慣れしてきた？

政治と行政

五城目町 町長

荒川 遼
(アラカワ シゲル)



<プロフィール>

- 昭和42年7月17日生まれ(57歳)
- 五城目小学校 五城目第一中学校
- 県立秋田南高等学校(昭和63年3月卒)
- 仙台経理専門学校(昭和63年3月卒)
- 仙台での会社員を経て家業、売薬商店(平成3年～)
- 平成28年 町議選初当選(3期途中で議員辞職)

五城目町 町長(続き)

- ・提言する施策
<5本の柱と45の施策>
- 柱① <過度から強い町へ> (施策数 14)
→防災・被災で災害に強くなる町の経済を強くする
- 柱② <町に住む方々が主役の町へ> (施策数 10)
→町で暮らす人々のコミュニティを強化・創出
- 柱③ <広域的に子育てを応援する町へ> (施策数 8)
→教育内容の充実、安定したこども園の経営

五城目町 町長(続き)

- ・提言する施策
<5本の柱と45の施策>(続き)
- 柱④ 活性化で賑やかな農社業へ (施策数 7)
→後継者や連携を強化
- 柱⑤ さらに文化の夏に高い町に (施策数 6)
→伝統の継承・芸術の促進

五城目町の行政組織案内

- 総務課
- 選挙管理委員会 : (タクシーによる移動支援)
- まちづくり課 : 企業からのふるさと納税、町のPR活動
- 税務会計課 : 税金に関すること、(入湯税) 施設整備における入湯客に課税)
- 生活住民課 : 空き家バンク、「秋田純種応援/スポーツ」
→**農の地域でも人が住んでいれば除雪などの整備が**
- 健康福祉課 : 福祉、介護保険
- 農林振興課 : 農業担当、林業担当
- 第三事業課 : 町府、ものづくりの応援、空き店舗情報の提供、きやどっこまつり広舎協賛申し込み
- 建設課 : 水道、下水道、道路除雪

五城目町の行政組織案内

- 農業委員会 : 農業者年金、
- 五城目町教育委員会 : 学校教育課、生涯学習課
 - 学校教育課: 教育費 県外の小学1年生から中学2年生まで、1週間から2週間の短期間、町内の小学に受け入れる
 - まだいかなる中学生の受け入れ
 - 生涯学習課: 文化の館、交流センター、地域図書館
- 五城目町消防本部
- 監査委員会
- 議会事務局

まちづくりの基本理念

令和4年度から令和13年度までの10年間における五城目町のまちづくりの最も基本となる計画



五城目町・千代田区児童双方交流事業

- ・五城目町は、姉妹提携する千代田区との児童と相互訪問を行い、それぞれの地域の自然や都市文化を体験しながら交流し、児童の人間性や社会性を育む事業を実施している。夏休みに千代田区、冬休みに五城目町で開催し、前をきながらお互いに訪問先を交換している。事業は学校教育課と観光課が連携し進められ、参加児童の中には卒業後もボランティア参加の意欲を示す者もいる。県補助が対象外で予算が減少する中、支援員の増員やホームステイ受け入れの確保、事業メニューの見直しなど、継続運営に向けた課題への対応が求められている。
- まだいかなる家でホームステイの受け入れを行ってくれた町からの要請に答えてくれる所は意外と多いのかも知れない

地域公共交通運行

五城目町では、車を運転できない高齢者などの移動支援として、**地理的条件が不利な地域に子ども通学専用タクシーや広域バス**を運行している。人口減で利用客減が予想される一方、高齢化により交通弱者は増加し、**乗合タクシーの需要性**は高まっている。

中心市街地の整備/又は制限が少なく生活圏に響いておらず、**新たな設備が課題**。今後は運行体制の見直しや乗合車向上、**住民主体の自家用有償運送**の検討も進める方針。

→移動の足が無いことで農業やイベント活動に消極的な方が多い移動手段が充実すれば交流人口が増えるかも

五城目町 町民まちづくりアンケート調査

- 【調査概要】
- 調査対象: 町内に在住する18歳以上の方
- 抽出方法: 2,000名を住民基本台帳から無作為抽出
- 調査内容: 住民意識、町政全般に関すること
 - 1. 自分自身のことについて
 - 2. 五城目町の取り組みの満足度、重要度について
- 調査期間: 令和7年(2025年)1月24日から2月7日まで
- 調査方法: 郵送、インターネット

<満足度が高い>

- ・消防
- ・教育
- ・食育
- ・キャリア教育

<重要度が高い>

- ・医療
- ・防災
- ・子ども

<満足度が低い>

- ・空き家
- ・新卒企業、就職機会
- ・農業の担い手

<重要度が低い>

- ・芸術・文化財
- ・町営住宅
- ・スポーツ

コミュニケーションと情報

レクリエーション：祭事

お話を伺ったことからの地域への推測
 新型コロナウイルス、人口減少・高齢化による影響が出ていることが分かる。

町内のイベント・お祭り

- さくらウォーク
- あちのく清流釣り大会
- こども緑日
- ハロウィンイベント (西山地区公民館)
- 盆踊り
- 地区対抗運動会 (今年高から友好試合)

農業系プログラム

- 農業体験プログラム
- 味噌と文化のむら
- 半農半X体験プログラム

益踊りの実現を願う声が多く、特に多いように感じる

これからについて

住民同士の繋がりが強く、今の五城目を頼りたいという思いを持っている人も多くいる。観光客や私達実習生のような関係人口が町にどんどん流入していくことで新しい町が生まれる予感、...?

↓

関係人口を増やすこと→自然、お店、ご飯などの魅力をより多くの人に知ってもらう

↓

TikTok、Instagram、Youtube short、Xで発信する用の動画作成をする

県内・県外の人に情報発信するのに安易かつ低コストな手段

参加者の学び

上田

SNS戦略

広報や観光誌は掲載日がわかるが、SNSは無料できる

↓

SNSには継続して(月8から10回、2~3日間隔を空けて)投稿する。

引き込まれるような**離構**成、オリジナル**編集**、バズるまで時間はかかるけど高い投稿を継続

↓

誰が撮影、編集、構成・内容の企画する？高齢者が多い五城目住民には届きにくいメディアがある

どーしよかなーと、とりあえず、試しに2、3本動画とる？

他にやりたいこと

秋田県民は生活習慣病の罹患率が高い。

管理栄養士からの健康指導、生活習慣病を予防するための食事の摂り方、生活(運動)方法の指導をする

↓ターゲットは？

中高生、若い頃に正しい知識を習得してもらって、早期予防に繋がって、20年後の体の健康に繋がると、おいらも、おいらもから向けが健康指導はよあるから、年代の若い層への健康指導・プレゼンに挑戦してみたい

↓対象は？

秋田大学と五城目の卒業生の交流(健康指導)が結び、健康に対して正しい知識を持った層者が増え続ける

↓

ウェブページやチラシが無く、みんな健康で幸せ？

・今の五城目町を築いていくためにはどうしたらいい？

五城目町の良さは、五城目町への愛が溢れている方が多いことや移住者を温かく迎えられる雰囲気があること、地域内での温かいつながりがあること、そんな今の五城目町を築いていくためには、この町を好きになってくれる人に来てほしい！

だけど、継続を目指しては町は衰退してしまう、生きていくためには「好き！」という気持ちだけで、地に足を付けて考えないといけない。

・より多くの住居にとってウェルビーイングな町とは？

移住者に関しても、町の暮らしに関しても両極端な意見が存在している。

薄井

加藤

これからさらに調べたいこと

人とのつながりがどうwell-being(幸せ/人生における充実感/奥深い人生の実感)に影響しているのか？

レジリエンスと「町のこし」

興味のあること

⇒防災・安全に基盤を築くこと大切。

- ・雨が降ること
- ・雨がよくなること
- ・避難すること

水害が発生したら助と共存する必要がある中で、いかに災害から復旧するか、それができるまちづくりができるかを考えたい。

フィールドワークの中で印象に残ったこと

「これがこのくらいいいから100年経ったらいいなあ」

⇒

「何もなければ衰退していく」「現状維持は後進である」

「このくらい」を維持しながら前進し、**進出**していきたくはないか？

中沢

幸せ = 安心かも...?



プロジェクト構想

シン・ハザードマップを作る

・従来のハザードマップは分りにくくあまり見られない

↓

・大雨・地震などシチュエーションに応じてハザードマップを重ね合わせる

・避難所などの情報に加え、住民の情報も追加する

・フィールドワークの中で感じたレジリエンスの鍵となる情報を付け加えていく

↓

町のこししながら災害に強いまちづくりの両立をデジタルマップで実現する

詳細

方法

実現したい成果

永田

私の中のキーワード:「つながり」

- ◆ 目には見えない色んな「つながり」が五城目町と私自身のwell-being・しあわせの土台になっている！
- 住民と住民:「みんなと会話をすると生き生きする！」
- 子供と高齢者:地域共同型保育でお互いが元気になっていく
- 五城目と外の地域:JICAの実習生、私たち等
- ・「つながり」があるから日々支え合うことができる
- ・しあわせが伝播しやすい！
- ・五城目で過ごして楽しく関わっているだけで地域の**一部** になる感覚

好きなこと・得意なことのコラボを見てみたい！！

例えば... **似顔絵プローチ** (ものかたり×すずなり)

「得意」を組み合わせたことで唯一無二の素敵な作品が生まれました！

- ◆ 五城目のみなさんは様々な特技や好きなものを持っている！
- > 写真、似顔絵、本、裁縫、料理、山登り、科学、医療、お酒 etc...
- > 意外な組み合わせも面白そう！
- ◆ かけ合わせることで五城目の魅力である「つながり」が深まるかも？

小田切

五城目愛と活力！何気ない日常が「しあわせ」！

五城目愛・・・地元住民も移住者も五城目のことが好き
 五城目の魅力を発信する・・・集客だと感じたら人が訪れる、移住する・・・アクションを起こす→住民が町の魅力を再認識する＆町の魅力を発信する→集客だと感じたら人が訪れる、移住する・・・
 というサイクルができています。
活力・・・新しいことを始めようというエネルギーを感じる
 「今のままでいいから五城目が長く続いてほしいけれど、何もしないと衰退
 →そのために小さなアクションを起こそう、継続しよう
 愛する町でエネルギーをもって生活することが「しあわせ」につながるのではないかな

堀元

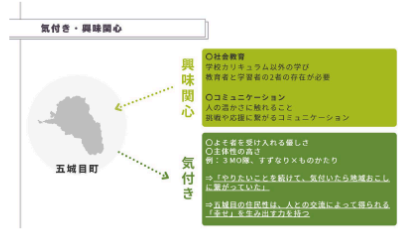
これからやりたいこと

・五城目町の住人全員との交流
 →人と交流しつながることの面白さと喜びを共有することは今すぐでもできそう
 今までのフィールドワークで知った美味しい食べ物やきれいな景色、面白い人 などをもっと多くの人と共有したい

細井

フィールドワークでの気づき

- ・**運動が「本物なら」ではのコミュニケーションの別**
 →町でイベントの中心に集まる集客の存在があるが、現場での活動は参加者が行っているところがある
 →町を活性化させるにはただ集客を寄せるだけではいけない
- ・**新たな出会いの「あわせ」**
 →自分にとってフィールドワークはとても楽しい時間だったが、それは何故か？
 →新たな出会いによって多くの刺激をもらえ、交流、時間が経つにつれて深まる信頼に居心地の良さを感じた
 →自然発生の動き
- ・**「遊学」は村と関係**
 →どのようなコミュニティがあって、どのような活動が行われているかを知らない集客が多い。また、移動手段の確保が難しく、気候に依って移動することが困難



今後について

私たちの訪問が既に町の変化に繋がっている



ご清聴ありがとうございました！
 質問や感想をお待ちしています！

5.2. 最終報告会

以下に最終報告会で発表した資料を示す。
 最終報告会では本実習の目的にそって各個人ごとに、

- ・自己紹介
- ・前半一週間での気づきや問題点
- ・考案したアクションプラン・プロジェクト
- ・プロジェクト実施の様子
- ・結果
- ・反省点
- ・自分にとっての「well-being」
- ・今後の展望

について発表した。



自分にとっての「Well-Being」

出会いとつながりにしあわせを感じた

つながりの中で他人を知り、考えを共有する中で自分らしさを見失わずに接することができ、受け入れてもらえること

今後の展望

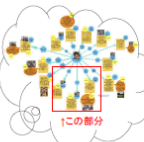
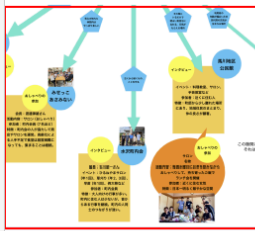
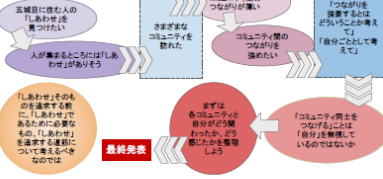
大学で、理工学部で学んできたことは今回の活動であまり役に立つことなかった
2週間で無力さを感じた

無力さを持ち帰ったときに諦めずに「経験」として蓄積し、同じような課題やなやみにぶつかったとき、0日目ではなく2週間と1日目として行動できるようにしたい

自己紹介



自分の心の変化



最終報告

1. 自己紹介
2. まとめ
3. 考えたこと
4. 新たな疑問



自己紹介

加藤のどか
神奈川県(海老名)出身
国際教養大学国際教養学部 2年
興味: 哲学、科学技術、AI
参加の理由: 五城目町に興味がある、学校の勉強以外のことをしたい、Well-beingに興味がある



まとめ

- ・ 人とのつながりがたくさんできた
五城目の人たち、8人の仲間



考えたこと

- ・ 五城目町にまた来たい
家から車で45分、ペーパードライバー卒業



新たな疑問



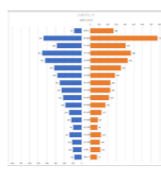
新たな疑問

1. 五城目町をどのように維持していくのか?
2. 五城目町における幸せをどう考えればよいのか?
3. どのように五城目と関わっていくのが良いのか?



五城目町をどのように維持していくのか?

- ・ 少子高齢化:
選別、農作業や暮らしの維持が難しい。
交通の便が悪くなる。
都会と比べて仕事の選択数が少ない。



五城目町における幸せをどう考えればよいのか?

- ・ 小さな幸せを大切にするのは、
現実逃避でもあるのではないのか?
洪水: 河川管理、地球温暖化
高齢者の孤立: 東京一極集中、産業がない



どのように五城目と関わっていくのが良いのか？

- 関係人口：五城目町を消費しているだけになってしまわないか？



地域づくりワークキャンプ2025

最終報告会 永田みのり

目次

- 01 自己紹介
- 02 この2週間で取り組んだこと・気づき
第1週：出会う
第2週：やってみる！
- 03 これらに向けて

01 自己紹介

永田 みのり (みのねん) です！

出身地 神奈川県横浜市
所属 慶應大学医学部3年
部活 弓道部
好きなもの チェロ



01 自己紹介

大きな転機：入院



心にぽっかり穴があいてからっぽ
↓
「病気になるってよかった！」

01 自己紹介

「身体も心も元気にできる医師に！」

↓
地域に出たい！！



群馬県みなかみ町



岐阜県美濃市



愛媛県西条市

02 この2週間で取り組んだこと・気づき

【実習のテーマ】

私/五城目町にとって

Well-being とは？

第1週：出会う

第1週：出会う

①五城目で「しあわせ」感じる瞬間たくさん！

→ 私にとっての「しあわせ」って？



第1週：出会う

②みなさんの生き生きした姿をみた！

→ みなさんにとっての「しあわせ」って？



第1週：出会う

まち歩きしながらみんなにとっての

「しあわせ」

を写真におさめてシェアする会をやってみよう！！

第2週：やってみる

第2週：やってみる

- 8/28 (木) フォトウォークを実施
- 参加者11名

みなさんにとって
「しあわせ」とは何ですか？

第2週：やってみる

- 朝市通りを散策
- 写真撮影



- 写真をシェア

第2週：やってみる

五城目しあわせコレクション



02 この2週間で取り組んだこと・気づき

「しあわせ」って 人それぞれ

エネルギー

ホッとできる

心が自由自在

02 この2週間で取り組んだこと・気づき

「しあわせ」って 変化する



「まるで空の色みたいに！」

「前まではじめまの町の町だったのが、最近森山をみると安心する」

02 この2週間で取り組んだこと・気づき

「しあわせ」って ひとつじやない

“キラキラな”
しあわせ

“じんわり
あたたかい”
しあわせ

Well-beingについて 気づいたこと

02 この2週間で取り組んだこと、気づき
私と五城目の「しあわせ」って
つながっている！



03 これらに向けて
もっとみんなの「しあわせ」を
知りたい!!!

↓

五城目しあわせコレクションの継続・拡大

人 地区・地域

03 これらに向けて
よければ一緒にやりませんか？



最終報告会

宇都宮大学
地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科4年
細井真加

本日の流れ

01 自己紹介
1.1お話しについて
1.2宇都宮大学について

02 気づき・疑問
2.1100部活の価値
2.2ゴジョウメ・コレクション
2.3地域から見た町役場
2.4わたしについて

03 振り返り
3.1活動を通じての気づきについて

地域づくりワークショップ2025

自己紹介 01

細井真加
宇都宮大学 地域デザイン科学部
コミュニティデザイン学科

2022年 2023年 2024年 2026年以降

2022年 学生団体「アト」の副団長
2023年 生活学習フェスティバル「アト」の副団長
2024年 大学の職員として就業
2026年以降 卒業後、就職予定



趣味: 動物園に行くこと、ドライブが趣味
特技: 肉店やイベント運営が得意
特技を活かして、学生団体に所属

学校紹介 01

地域デザイン科学部
コミュニティデザイン学科

ハード面:
物理的な設備や構造物

ソフト面:
人間関係や組織風土、
ノウハウといった
目に見えないもの

コミュニティデザイン学科
社会基盤デザイン学科

2週間の活動 02

プロジェクト前半 6月17日～6月22日

中間報告会 6月23日

プロジェクト後半 6月24日～6月29日

地域訪問を基に見つけた地域の課題や実情等を用いて、自身の興味関心と照らし合わせながら、後半に向けた自分なりのプログラムを考える期間

前半の活動を通じて、さらに深く地域と関わることで最終提案に繋げていく。

プロジェクト前半 02

だまご餅体験 駒山登山 馬場目わくわくの会

朝市通りで五城目町民の皆さまとお話する機会もいただきました。

前半

中間報告会

後半

プロジェクト後半 02

地域の方との食事 個人訪問 ワークショップ

前半

中間報告会

後半

ゴジョウメ・コレクション 02

地域の内部層そして関係人口との繋がり

工藤 正基さん
「ははは先生」

元高校教員
もりのまことさん
もりのまことさんと一緒に活動する中で、地域に入り込みやすくなる（五城目町の交流も…）

「協働的な情報共有」
関係人口となるJICAや学生がプログラム終了後に、これまでの気づきや交流を共有できるように

ゴジョウメ・コレクション 02

〇課題①地域課題
町に外人の目にも入るようになり、飲食店やおみやげなどのブームがきっかけで、観光客が増えるのが今後の自身の関わり方を決めることになる。

〇課題②更新課題
今後、五城目町に訪れるJICAや学生たちが「暮らしたい」と思えるような仕組みづくりが必要である。

〇気づき
人を魅力的に見せる文章を書くことは、かなり難しい。対象者意識がなくて書いたところを批判したが、懸念する文章にならない。

住民から見た町役場 02

役場に対して敷居の高さを感じている方がいる

今後、一般行政の道に進む身として、かなりショッキングだった

町役場

対等な関係

地域住民

住民から見た町役場 02

町役場

対等な関係

地域住民

住民から見た町役場 02

宇都宮市の取り組み

宇都宮市役所
主体は、宇都宮市役所。
宮の朝活に参加して宇都宮市民が、今度は職員と共に運営者側に向けて、魅力的なプランになるように企画を考案するなどしている。

⇒日常の中で協働する機会がある

住民と役場は密接な関係であるということを認識

運かい思い出 02

Uターンをしたくなるような町に

五城目町は今後も続いていく町に、今いる町の子もまた「暮らしたい」「まちのために学んだことを活かしたい」と思ってもらえるようにならなくてはならない。運かい思い出を子どもたちに伝える機会を考えた方がいいと思った。

小さくてもいいから、溢れんばかりの笑顔とかがたつように「懐かしい」が伝わる町に。

課題
・仕事がない
町の方とお話していく中で、今働いている方に話しかけてほしいけど「学んだことを活かすことができない」「働かない」から難題にぶつかってきてほしいというところまで話したいという声もかなり聞かれました。




今後について…（振り返り） 03

〇五城目町との関わり方
町民の暮らしや課題などと一緒に働いて、本当に心が通った。自分もまた関わりたいという気持ちで活動できた。今後、学生としてまたプログラムに参加することはできないが、五城目町の活動やイベントなど来やすい機会にまた行くことで、長くも長いつながりを持ちたい。

〇わたしについて
地元での生活に入用した時に、地域の方との関係構築を怠っていたという自覚があった。後悔に、町に出る公務員になりたい。そして、この心を守りたい。

2週間ありがとうございました！！



また会いましょう！

2023/06/03


最終発表会


ハザードマップから社会のつながりを 見出すことはできるのか？

慶應義塾大学 環境情報学部 環境情報学科 2年 中沢蓮花

【自己紹介】

- 大学・専攻
慶應義塾大学・環境情報学部
建築を学んでいます！
- 好きなもの
水筒
建物
- 趣味
オーボエ





【私にとってのwell-being】

好きなこと

- 寝ること
- 食べること
- 考えること

苦手なこと

- 人とお話しすること
- 柔軟でいること
- 言語化すること

【私にとってのwell-being】

自分らしくいること

- ひとりで色々考えるとき
- たくさん寝るとき
- みんなと話しているとき
- ふらふらしているとき

【五城目町にとってのwell-being】

興味のあること

- 防災
- 水害が発生すること
- 熊と共存すること

印象に残ったこと

- まちが探っていくこと
- まちが遠んでいくこと
- 「現状維持は衰退」？

【五城目町にとってのwell-being】

人とお話
町の方のあたたかさ

水害

熊

おいしいご飯

雇用の減少
若者の流出

well-being / 幸せ = 安心かも...？

【プロジェクト】

地域のつながり

コミュニティの結束と防災には強い関係がある

人と話すことが苦手

社会とのつながりを保てるか

ハザードマップから社会を見つめる

【プロジェクト】

ハザードマップを読む

現状・課題

方法

成果

【ハザードマップを読む：課題・現状】

五城目のまち

- 八郎湖周辺は土地が低い
- 大きな川が2本(高塚目川、雷津内川)流れている
- 東部・南部が高山がちな地形である



【ハザードマップを読む：課題・現状】



【ハザードマップを読む：課題・現状】

町部を中心に地図を読む

町部では土地が低くなっている

住民が町部に集中している

町部の面積が小さくプログラム内で多く割れた

【ハザードマップを読む：方法】

ハザードマップから社会のつながりを見出す

- これまでのフィールドワークでわかったことハザードマップを基盤としていく

洪水管理地域に
ほとんどなものが
あるか

避難所はどのよ
うな場所に位置
しているのか

人の集まりはど
こで発生してい
るのか

など

【ハザードマップを読む：成果】

やってみてわかったこと

- 八郎湖村との災害リスクの違い
- リスクの大きいところとそうでないところの差異
- 避難所の状況
- やっぱり2週間では情報が足りないこと

もっと時間をかけてみなさんからお話を聞きたい！

【今後の自分について】

自分に素直になれたこと

自分を大切にすることの重要性

社会とのつながりや課題に着目する

コンフォートゾーンから一歩抜け出してチャレンジをしていきたい

【プログラムを通してのまとめ】

大切な経験になった！

- 地域診断ができた
- 沢山の方とお話してきた
- 自分と向き合うことができた

また五城目に来たい！

- 人の優しさに触れた
- 人とのつながりができた
- 美味しいご飯がたくさん食べられた

お聴きいただきありがとうございました！

2025地域づくりワークキャンプ 最終発表

五城目にある「しあわせ」

「楽しいところには人が集まる？」
の視点からみた五城目町内のコミュニティ
慶應義塾大学看護医療学部2年 薄井咲樹

自己紹介 慶應義塾大学看護医療学部2年 薄井咲樹
長崎出身 埼玉在住

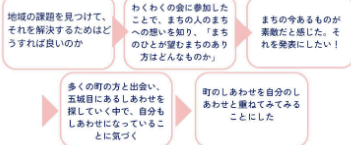


○五城目に来た理由

地域での医療の様子を見て
みたいと思ったから

自分が住んだことのある地
域とは異なった性質を持っ
た地域について知りたいと
思ったから

○2週間での自分の変化



○プロジェクトについて

○テーマ

「楽しいところには人が集まる？」

○テーマの理由

・「楽しいところには自然と人が集まるのではないか」というのはわくわくの会での皆さんの言葉
・フィールドワークをする中で、深く実感し、コミュニティの観点ではそこが「楽しい」場所であることが意味を持つと感じた。

○内容

- ・簡単な概要や様子
- ・私がそこで感じた「しあわせ」

○方法

町内の人が集まる場所や公民館に実際に伺い、館長さんにインタビューをしたり、その場にいた方と一緒に会話をしたり、コミュニティの活動に参加したりした。
(ここにこの商店、団体の家、みせっこあきみない、内川地区公民館、富津内地区公民館、馬川地区公民館、町内センター、大川地区公民館)

○「しあわせ」の定義

「心も体もリラックスした状態にられること」
「プラスの気持ちでられること」
「暖かさを感じられること」

- ・この定義はこの2週間で見つけたもの
- ・心許せる仲間と安心できる環境にいたときにすごく心地よかった
- ・人の優しさに触れたとき、心も体も暖かくなるのを感じて、これがしあわせだと思った。

フィールドワーク① にごにご商店



朝市通りにある商店。
(以前は五城目中央ドラッグ)
朝市の際に休憩しに人が訪れ自然発生的な交流が生れる場所。
お店の方もとても暖かく、私たちを迎え入れてご飯を振舞ってくださった。
どんな人とも温かい雰囲気が生まれる嬉しい場。

フィールドワーク② みせっこあきみない



地域の人がつながるきっかけとなる場所。商を見知った人の日常のコミュニケーションが住民を明るく、健康にさせる地域唯一の空間。
私たちも命懸けに入れていただき、とても楽しい時間を過ごせました。
近所の神社をお参りしていたのに加えて、贈物を借していただき、様子を見にきて下さいました。

フィールドワーク③ 富津内地区公民館 (ふとう会)



富津内地区公民館で陶芸の活動をしている「ふとう会」
付き合ひの長い仲間とゆったりマイペースに楽しむリラックス空間。陶芸を丁寧に教えてくださり、私たちの移動の際には車で送迎していただきました。

フィールドワーク④ 馬川地区公民館



秋田一番面白い場所
約10年続いているご婦人の集まりに参加させていただきました。
明るくて元気な大きな笑い声と笑顔で迎えられる暖かな空間。
お互いのお互いを大切に思っていることが伝わってきました。
帰る際、夜間や距離からずっと手を振ってくれていて、心が温まりました。

最後に

- 自分にとっての「ウェルビーイング」とは「自分の心の動きを感じ取れること」
- これから今回のワークキャンプでは、五城目町にあることを通じて自分を再発見する機会となった。自分がどのようなことで感情が動くのか、自分はどういうことが好きなかなど自己理解を深めることができた。この経験は私の人生において、大きな意味を持つものになったと思う。これからも今回見つけた「私」を大切にしたい。



GOJYOME LIFE

秋田大学医学部保健学科看護学専攻
2年 上田葉士

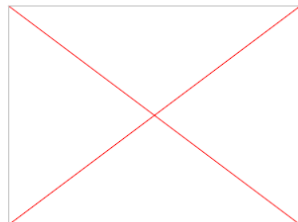
上田葉士(20)について

所属:秋田大学医学部保健学科看護学専攻



上田葉士(20)について

出身:岩手県宮古市



趣味～陸上競技～

陸上競技 800m、1500m、ハーフマラソン





趣味～旅行～



特技

- ・文武両道
- ・コミュニケーション能力

初めの1週間での考え・気持ちの変化

心の声(1週間目)

- ・五城目町で過ごして見つけた自分の楽しい、幸せとはなんだろう
- ・僕は五城目町で何が出来るのだろう

- ・ジュディーさんや達樹さんが紹介してくれた人としか繋がれていない、既存の繋がりに僕がおじゃませしていただいているかかんに違和感
- ・町全体を巻き込むには？
- ・コミュニティってそんなに大事？繋がりの強要にならない？

アクションプラン(1週間目)

- ・中高生に向けた健康指導、健康について一緒に考える会
- ・中高生のニーズとは？
- ⇒初めは生活習慣病の予防に向けて考えていた
- ・僕の経験を活かして、中高生アスリート、部活動一所懸命頑張ってる人向けの食育？
- ・生理やPMSについて男女一緒に考えてよう
- ⇒男女双方の理解が、オープンなコミュニケーションに繋がって、女性により生きやすい社会に、QOLの向上に繋がる

僕の好きってなんだ！
今までの自分は色々考え過ぎていた

悩みに悩んだ私は一人で旅にでます👉



僕の好きの追求⇔五城目の幸せ

将来に対する考えも変化

2週間経った今の考え・気持ち

私の強み、性格

- ・飯田が、五城目が大好き！
- ・コミュニケーション能力
- ⇒初対面の人ともすぐ打ち解けあえることが多い
- ・人に興味がある
- ⇒今まで知らなかった価値観、考えの発見
- ・行動力
- ⇒やるよと決めたなら熱が冷める前にまず動く
- ・落ち込むことはあるけど、明るい性格
- ・フレンドリー

今後の自分と五城目町の関わり

- ・郡伊予出身
- ⇒中高生の悩み相談
- ・中高生時代の自分の経験
- ⇒小さい頃の自分は視野が狭かった、どうしても小さい範囲にいると考えが狭り固まったり、少ない知識、経験で物事を考えてしまいがち
- ・五城目町の今更なることあるについて考え足跡のお手紙がほしい
- ⇒少しづつ長い時間をかけて町に馴染んで行く、信頼を得る
- ・本当に五城目町が大好き！！

上田集士の名前の由来

集:素敵な良い人が集まる
士:武士のような男



関わってくださったすべてのみなさまへ

2週間、貴重な経験を
ありがとうございました!!!

6. 各参加者の学び

6.1. 上田集士 (秋田大学医学部 2年)

6.2. 薄井咲樹 (慶應義塾大学看護医療学部 2年)

私は、この実習に地域での医療の様子を見てみたいと思ったから、自分が住んだことのある地域とは異なった性質を持った地域について知りたいと思ったからという理由で参加した。しかし、実際には思っていた以上のことを学び、感じることができた。地域診断の手法を通して、単にまちづくりについてだけでなく、期待と現実とのギャップへのアプローチの難しさや、自分事として物事を捉えることの重要性、感情を共有することの心地よさなど、挙げればキリがないほど多くのことを吸収できた期間となった。また、私は人前で発表をしたり、自分の考えや感情を言葉にしたりすることに苦手意識を持っており、今回の実習で克服したいという裏目標も持っていた。毎日のチェックイン・チェックアウトや地域の人との関わり合いの中で、少しずつできるようになっていく感覚があり嬉しく思っている。

五城目での二週間の滞在の中で、私はたくさんの「しあわせ」や新しい自分に出会うことができた。それらを与えてくれた五城目町に何かの形でこれからも関わり、恩返しをできたらと思っている。

6.3. 加藤のどか(国際教養大学国際教養学部 2年)

私は、五城目町に以前から興味を持っていた。参加の決め手となったのは、2週間という長い期間五城目に滞在できること、Well-beingというプログラムのテーマである。このプログラムをとおして、地域について深く知り、それに対して自分がどう関わっていくことができるのかということ、人のWell-beingと結びつけながら考えることができたなら素敵だと思った。自分にとっては、1週間、知らない土地で、様々な人と関わるのは、アウトプットがとても追いつかないほど豊かなインプットであった。もちろん、五城目のことが大好きになった。自分は、秋田に住んでおり、五城目と続けて関わりやすい環境にあるので、今後も関わり続けながら、今回のプログラムを通して得た疑問をじっくりと考え続けたい。そして、五城目で人々がしあわせに暮らすことに自分も関わっていけたら良いと思う。

6.4. 中沢遥花 (慶應義塾大学環境情報学部 2年)

地域診断という言葉も聞いたことがない状態で参加を決めたが、健康問題だけでなく町の課題やそのままの町の様子を見ることで、町に貢献したいというところと自分のやりたいことを結びつけながら最終プロジェクトを行うことができた。事前学習ではデータを元に入念に調べたつもりでいたが、実際の町の雰囲気などはやはり行ってみたいとわからないと痛感した。ただ行くだけでなく、2週間現地に滞在し町の方と関わりながら過ごすことの価値を感じた。特に食事の場面でそれを感じた。地元の飲食店に行き時々地域の方と会話をしながらご飯を食べること、スーパーに行き地元の食材でご飯を作ること、そのどちらも「五城目に住む」ことが具体的に became し、町についてよく知ることができた。一方で、最終プロジェクトでも取り上げたが熊や水害などが生活の近くにあることを実感した。それも、町で生活したからこそ感じた部分であると思う。また、この2週間はよく人と話した。地域の方とお話しするだけでなく、メンバーやコーディネーターの方とコミュニケーションを図ることによって少しずつ関係性を作りながらプロジェクトを進めることができた。また、メンバーの中には相手から話を引き出すことが上手な人も多くおり、インタビューなどをする上でとても勉強になった。

この2週間は私にとって非常に実りある時間であった。ここでできたつながりを大切にして、五城目に貢献できたらと思っている。

6.5. 永田みのり(慶應義塾大学医学部 3年)

この2週間の実習を通して、私の中の「まちづくり」に対するイメージは大きく変化した。実習前までは、まちづくりとは「まちづくりをしていこう」という意識を持って組織を動かしていくことだと認識していた。しかし、私からは五城目町を形づくりまさにまちづくり担われている見える方々にお話を伺うと、みなさん「なにかを成し遂げよう!」という意識で活動されているわけではなく、自分の信念に基づいてやっていて楽しいことややりがいがあることに取り組まれていることがわかった。そういった一人一人の取り組みが合わさりながら最終的にまちづくりがされていくのだということも学んだ。地域診断にはアクションプランの立案というステップがあるが、何かしなければいけないという思考から離れ、自分たちが五城目にいること自体がすでに町に何かしらの変化をもたらしており、そういった人との関わりによって流動的に町は変化し、まちづくりが行われているのではないかと考えるようになった。

私は昨年度も慶應義塾大学が主催する地域診断実習に参加させていただいた。昨年度までは、慶應義塾大学の医学部・薬学部・看護医療学部の医療系学部の学生のみが主な対象であったが、今年度の五城目町での実習には、医療系の枠を超えた学部、学年、大学、出身地の学生が参加した。バックグラウンドが異なる学生たちと経験を共にし、五城目町や自分たちの興味について語り合うことができたことで、視野が多分野へ広がった。地域を多角的にみる地域診断において、このように異なる視点を持つメンバーと協働していくことの重要性を体感した瞬間だった。

この2週間は、何より五城目町という町と五城目町のみなさんのことが大好きになった期間だった。物理的な距離は離れているが、様々なイベントなどで今後も長く関わっていきたいと思っている。

6.6. 細井真加 (宇都宮大学 地域デザイン科学部 4年)

「地域・私にとってのwell-beingとは何か」

この問いかけは、五城目町を初めて訪れた日に漆畑先生から私たち8名に与えられたものである。私はこの問いを胸に、2週間のプログラムを通して自分自身に何度も問い直してきた。その中

で辿り着いた私なりの答えは、「この2週間を通じて得られた”繋がり”を、これからもどうにか残していくこと」であると考えている。

五城目町はJICAや秋田大学の学生、留学生など、私たちのように町外から学びに訪れる関係人口は少なくない。そのため、このプログラムに参加していく中で私たち学生を温かく迎え入れてくれる方が非常に多い印象がある。しかし、関係人口が多い故に、これまでの外部との関わりについて地域の方に伺ってみると、町外から訪れた人が去っていくことが当たり前になってしまっていることがわずかに感じられた。

2週間のプログラムを通じて、町民の皆さまとの繋がりからとても温かい思いを与えていただいた。町を離れてから1カ月半がたった今でも、五城目町のことを思い出すと胸がポカポカと温かくなることを感じる。遠く離れていても、「繋がり支えとなっている」こと、「地域を思い、自分ができること恩返しをしていきたいと感じている人間がいる」ことを伝えたい。そして、自分の行動を通じて、プログラムや学びが終わってしまっても、繋がり残りを残すことを伝えられたら...と思う。

6.7. 堀元嶺 (慶應義塾大学理工学部 3年)

五城目町では高齢化が進み、移動手段の不足が地域活動への参加を難しくしている。公共交通の便が限られているため、遠くへの移動が困難で、イベントや集まりに消極的になる住民が多い。こうした状況の中で、町のコミュニティは自然と高齢者を中心とした形へと変化しており、町の催しや地域行事では常に高齢者が主役となっている。一方で、かつて地域の活力の一端を担っていた子ども会などの活動は縮小または消失している地域もあり、若い世代の関わりが減少していることが課題として挙げられる。町の活性化を考えるうえで重要なのは、こうした高齢者をどのように地域の担い手として取り込み、彼らが生きがいを持ちながら関われる場をつくるかという点である。

フィールドワークを通して感じられたのは、新たな出会いから生まれる幸福感であった。地域の人々と関わり、交流を重ねるうちに深まる信頼関係は、心の居場所のような安心感を与える。こうした出会いの機会が増えることで、町全体の幸福度も高まる可能性がある。しかし、そのような交流が自然に生まれることは容易ではない。多くの高齢者は、自分の住む地域にどのような活動やコミュニティがあるのかを知らず、また移動手段が限られているために参加のきっかけをつかみにくいという現実がある。結果として、交流やイベントは限られた範囲で行われ、地区間のつながりは薄れがちである。それでも五城目町の人々の間には、日常生活を支え合う共助の精神が深く根付いている。助け合いを目的とした集まりや、暮らしの一部を共有するようなコミュニティが多様に存在し、それぞれの地区が独自の特色と強いつながりを保っている。離れた地区同士で頻りに交流しなくても、町民はすでに「五城目町の住人」という意識のもとで結びついており、今ある関係の中に満足や幸せを見出している。町の課題は、こうした既存のつながりを尊重しながら、誰もが気軽に参加できる新しい交流の場を生み出し、高齢者を含めたすべての世代が再び地域の活力を感じられるようにすることだと言える。

6.8. 小田切優奈 (秋田大学医学部 1年)

五城目町では、地元住民も移住者も「五城目町が好き」という思いを持っており、町全体に温かい一体感が生まれていると感じた。町を「起こす」というより「残す」ことを目指して、今の自分のできることを考えて実践した2週間だった。住民も訪問者も町に関係する人々が結びついている五城目町で、さまざまなコミュニティを訪れて、どういうところにどんな人がなぜ集まるのか、人と人とのつながりとはどういったものかを考えた。地域の方々と関わるなかで、地域と向き合うことはそこに住む人と向き合うことであり、人と向き合うことは自分と向き合うことだと分かった。五城目町という地域を見つめると同時に、幸せの根幹を垣間見たように感じた。「しあわせ」に引き寄せ

られるようにして人が集まり、「しあわせ」に住み続ける。五城目町がそんな地域であり続けてほしい。

7. 謝辞

今回、実習の実施に当たって多くの方々にご協力をいただきました。事前準備から現地実習をコーディネートしてくださった漆畑 宗介先生、八嶋 美恵子さん、現地実習でもサポートしてくださった春田先生、米澤先生、富崎先生に感謝申し上げます。以下、私達の実習に協力してくださった皆様を紹介させていただきます。ここには書ききれないほど町で様々な方と出会い、お話を伺わせていただきました。この実習に関わってくださった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

コーディネーター

五城目町役場のみなさま

五城目町集落支援員のみなさま

シェアビレッジ町村 本田望恵さん

かがくとあそぼ！ 工藤正孝さん

もっと森山をもりあげ隊 工藤兼雄美さん

もっと森山をもりあげ隊のみなさま

ばばめわくわくの会のみなさま

BABAME BASEのみなさま

清流の里のみなさま

友愛館のみなさま

まどいの家 of みなさま

森山公民館 千田さん

福祿寿酒造 彦兵衛さん

森川公民館のみなさま

POCOPOCO KITCHEN

ふれあい館のみなさま

みせっこあさみないのみなさま

内川公民館のみなさま

水沢地区町内会町長さま

馬川公民館のみなさま

町内センターのみなさま

富津内公民会 ふよう会のみなさま

大川公民館 ハーモニカ同好会のみなさま

その他、町であたたかく私たちを迎えてくださったみなさま